

宮本武藏藏

宮本
七郎
速記

8
619



東京
共進館

序

國に依り處に因り、さまざまの慣習ある中に、我國風として、徳川末世に及ぶまで、復讐をもつて上下の美事とあし、武士は更なり百姓町人に至るまで、君父の仇には俱に天を戴かざとあし、以つて一般の氣象を鼓舞養成せられたりき。由來我國は儒教盛んにして、忠孝信義の道に厚く、之れに背けは甚しき不義者となり之れを完ふすれば善義人と賞揚せらる。善惡二道の褒貶譽は、驕つて仇討の厲行とあり、然も武道に名譽を傳へし、偉人の遺迹を尋ぬる時は、多くは危き淵瀕



小
額





特子
619

宮本武藏

宮本武藏之傳

一龍齋貞國講演
宮澤彦七速記

第 一 席
宮本武藏政名先生のお父上は毛利右馬頭輝元公の御家來で、食祿三千五百石を賜いて、番頭役を勤めて居ります。吉岡太郎左衛門といふ人で、此お方が若盛りの時、足利十三代將軍義輝公の御前に於て、名代劍客者を十八人對手へ廻る、唯一人にて勝負をいたし、十八人に打勝つたといふので、日本に二人とないといふ。仰せられ、義輝公より其の名無二齋と給はる。吉岡小太刀の大名、人毛利家に於て、お方、此吉岡太郎左衛門無二齋長門の國、萩の新見といふ所に、お住みであるから、俗に此先生の事を新見無二齋と呼びます。本

を渡り、自刃の街を出入せる、復讐美談の存せざるはなかりき。仇討歟。仇討歟。世は敗類不徳の甚しきを見る、一片の靈光は赫として克く萬人の同情を蒙り、尙其熱血を瀦がしめよ。義烈人を益するの文は、決して閑文字にあらざるなり。

明治辛丑涼風寒裡に於て

天野 橋 節 誌

宮 本 武 藏

郎左衛門先生に御子息が兩人ございまして、御總領を主水といつて、次男を平馬と申します、兄主水は至つて病身であるから、太郎左衛門は御心配でございませう、平馬の腕前が出来る丈けに何か間違いがあつてはあらんといふので、平馬は新見村から僅か離れて居ります、昌安寺村の昌安寺の住持泰山といふ者にお頼み遊ばせて、太とうか、悴平馬を出家させて貰ひ度ひといふ泰山和尚御存じ、あいか、泰承知いたるまゝたといふので、是より平馬を頼かつて昌安寺へ戻りませう、吉岡平馬も出家にはあり度く、あいが父の附附であるから止むを得ず、昌安寺に止まりにありませう、夫が平馬殿十三才の六月でございませう、十三、十四、十五、と足掛け三年昌安寺にお在である、内、固より、伶俐であるから、泰山和尚より、真言秘密の法まで教はりませう、時に十五才の冬十月、茲に土州河内郡平城山の麓、天城村の郷士で、神傳有馬流棒の使ひ手有馬喜左衛門

宮 本 武 藏

信賢といふ者がある、身の丈六尺三寸、力量普通に超て居る、故ゆへに、已れの棒が出来るのを、自慢で、大勢弟子を連れて土州天城村を發足いたる、攝州大坂へ出て參り、大坂へ道場を開きませう、唯、有馬流棒の指南といふ看板を掲げて居つたら、左程の憎みも請かかつたら、うに、土臺傲慢の奴だから、佛道は釋迦に問へ、儒學は孔子に問へ、武道は我れを以て師と頼むべきものなり、神傳有馬流棒の指南有馬喜左衛門信賢と、宏大も、あ、看板を掲げたので、攝州大坂中での評判になりませう、スルト、豊臣秀吉公大坂に御在城であらせられ、是を聞いて甚だ御立腹を遊ばせ、憎むべき奴だといふので、増田右衛門尉長盛へ仰せ付られ、有馬喜左衛門信賢は、遂に大坂をば追放されて終ひませう、喜左衛門如何にも念残に心得て、喜秀吉は世の中の者が名將だといふが、少も名將ではない、我が腕前を知らん奴であるから、情けない、併、我が事が未だ諸方に知られん

で、人々が輕蔑するのであらう天下に名代奴を二三人物の美事に打負せば、我が名前も必らず六十餘州へ響き渡るに違いないと考へた夫に老ても誰を一番負えて遣らうと元來馬鹿野郎だから段々様子を探つて居たが喜宜と長門の國萩へ乗込んで、毛利の家來吉岡太郎左衛門那の爺を打込んで呉れやう、今天下に無二齋の名のある是を打負せば、我が名前は日本中響くに相違ない、然らば吉岡の老を毘り倒れて遣らうと弟子を四五人連れて、長門の萩へ乗込んで参り萩のお城下備前屋といふのへ宿を取り翌朝新見を差えて唯一人、太郎左衛門の屋敷へ参つて玄關へ掛り喜お頼申すもの申うドレ……何れからお出でにかりましたか喜然れば吉岡先生御在宿をちば一本お手合せを願ひ度ひ、斯申す下拙は土州天城村の産有馬喜左衛門信賢と申する者でござる吉岡の家來が、ハ、ア天下の高名の馬鹿野郎が来たと思ひ、お氣の毒

さまであらう、喜左様か、然らば明日罷り越すでござらう喜左衛門が歸つて行く跡を見送り、呆れ返つた馬鹿野郎吉岡老人に申上げると、太郎左衛門「太明日亦来て逢ふと面倒であるから、留守だ」といつて置けし承知いたしたまは、翌日喜左衛門やつて来ると、お氣の毒さまで、今日もお留守、亦翌日来ると、今日もお留守だといふ五六日續けて来ると、始終に留守だといふから有馬喜左衛門が考へた喜ハ、ア吉岡の目ボク爺到底我れに及ばないのを知つて留守を遣ひ居るナ、待て、何か吉岡の爺を釣出す計略はあるまいか、と段々様子を聞くと、吉岡太郎左衛門の次男平馬といふのが昌安寺村昌安寺の寺小姓を志して居るといふから、宜と是を餌に太郎左衛門を釣出さうといふ心算で、昌安寺へ道入つて参り

宮 本 武 藏

何か半紙へ認めめてあるのを懐中から取出し、後て用意をえて来た飯粒で、右の書附を昌安寺の門の親柱へ貼付けて行つて終ひました。門番が是を見て、番何だい恐ろしい事が書いてある。夫を破らないやうに刻して、番吉岡のお坊様へ、平何だ、番貴所のお名前、斯んな物が貼てありましたよ。平ドレ、見せる平馬取上げて見ると、相變らず傲慢が書いてある。平何だ……佛道は釋迦に問へ、佛道は孔子に問へ、武門は我れを以つて師と頼むべきものなり、斯いふ者は土佐の國河内郡天城山天城村の住人有馬喜左衛門信賢、吉岡平馬へ……猪口才な奴だ、日本無双の大馬鹿野郎宜え、平馬部屋へ這入つて筆を取上げ、サラ、と認め、平是を、門へ貼て置いて呉れる。番承知いたしました。門番が親柱へ貼て其の晩は寝て終ひました翌日に相成ると有馬喜左衛門、棒を脇に挿込んで昌安寺の門前へ來ると、門に貼札がしてある。喜

宮 本 武 藏

ハチナ未だ刻さないのか近寄つて見ると、自分の書いたのでは無い筆蹟が違つて居る。喜ナニ……佛道は釋迦に問へ、佛道は孔子に問へ……何だ同じやうな事が書いてある……武藏は我れを以つて師と仰ぐものなり、斯申す者は吉岡平馬、日本無双の大馬鹿野郎有馬喜左衛門信賢へ、ハイ左様ならアバ、……何だ、不埒な小僧だ、と突然門内へ跳り込み、玄關へ突立ち上つて、喜頼むもの申う、役僧是を見て驚ろいた。役僧サア大變若旦那貴所がそんな事を書いたから、有馬喜左衛門といふ奴が怒つて玄關へ來ましたよ。平決して怖がる、對手も人間私も人間、体格の大きいのは驚ろかんか、役僧だつて若旦那強さうな奴です。平見掛けは強さうでも驚ろかん体が大ききともブ、中がブ、だから、實がサク、して旨くない。役僧夫は若旦那唐茄子の事ですが人間でございますよ。平恐れないよ、平馬は澄したもので、全然と

宮 本 武 藏

して玄關へ出て来たが平ア、何所から来た、私は吉岡平馬だが
何だ喜ウーム、其方が吉岡平馬か平如何にも私が吉岡平馬だ
喜平馬なら筋違に出て来い、真直なんぞに出て来やがつて平私
は平馬の格が宜いから真直に出て来る、成らない平馬は筋違に出
るが何だ喜コレヤイ日本無双の大馬鹿野郎とは何だ平馬カラ
くど笑つて平如何にも日本無双の大馬鹿野郎だから馬鹿野
郎と申したのだ天下の人は宏大有り汝より外に武藝者は無いや
うに大言を拂ふは片腹痛い面を洗つて出直して来い喜吐露た
りやナ小童サア有馬流棒の極意を見せて遣る平、望みに任して
見て遣はす有馬喜左衛門跡へ退つて袂へ入れて来た、袂の棒を
掛け、長さ八尺、八角に削り上げた棒を麻売の如くに振廻す、昌安
寺村の百姓も寺中の者も呆氣に取られ恐ろしい強さうな奴だナ
と見て居る喜サア小童支度をいたせ平馬笑つて平私、私は常に

宮 本 武 藏

第三席

支度が出来て居る一々棒を掛けたり鉢巻をしなれば使へない
やうな其んな不自由な武藝は學ばんからナ喜何だ此野郎小
僧の癖に大言を拂ひ憎い奴だ平馬は短かい木劍を取つて平
ア来いと時眼に附ける喜ナニオッ……と有馬喜左衛門棒を八
双上段に構へヨリくつと取詰める、見たばかりで大きな奴、恐怖
どもしないで平馬が構へて居ると、エイッと振込んで来る棒、ア
ヤ打たれたりと思ひの外平馬は彼方へ飛開く

喜左衛門失策たりと横に拂ふを平馬、さえたりとヒラリ飛退く
亦やり損くさつたと屈んで打込んで来る、尙も左り側を廻ん
で風車の如くに振込んで来るのを、平馬は脱つ潜りつゝ居る其
の早業眼にも止らず、見て居た村内の者、寺中の者も皆驚ろいた、恐
ろえい早業だ、吉岡の若旦那の逃げる事亦轉つた、ソラ潜つた、剛い

ものだ、喜左衛門奴亦打ち損くあつた、亦素股を喰つた、ソレ喜左衛門が踏眼けやがった、態アねへ十喜左衛門必死にあつて棒を振込んで来るが驚ろいた、喜さんといふ手業の早い奴だ、ど魚り立つて来る内、流石に喜左衛門も汗がダク、出て来る、終ひには棒が振り疲ひれるし、腹は空て来る、是から云ひ馴したのであります、か、腹の空た事を俗に喜左衛門にあつたといふ、是も的にはありませんが、十分には有馬喜左衛門疲れを覺へて、棒先きの亂れて来た所を飛込み来つて平馬、エイッとして下から棒を拂ひ上げたに依つて有馬喜左衛門、ロロ、と後へ退る所へ飛込んで行つて平馬が腰の番を健たかに打つ、タ、と送過と仰向けさまに喜左衛門がド、と倒れる、途端に松の根方へ頭の窪を打付たから、其の儘に喜左衛門は、喜ッ、と眼を眩して終つた、是を見て大勢が呆れ返つて、どうだい、ア、途々棒野郎眼を眩して終つた、一同肝を潰

して居る所へ穴掘りが出て来て、穴掘お坊ちや、此野郎は死んだのです、かい、何といふ脆い奴だ、直ぐに穴を掘つて埋て終ひますから、平馬が聞て、平、コレ、と、爺逸まつては往かん、今に蘇生するのだから、埋るのは可哀想だ、穴掘へエ、然うですかい、眼を眩しやアがった、か、此野郎が蘇生つた日にやア、乃公が穴掘り賃を二百貫ひ損くな、平馬、後ろへ廻つて活を入れたから、喜左衛門は心我れに返つた、平、コレ、喜左衛門、汝のやうな未熟者が父の太郎左衛門と勝負をなさるとは、猪口才千高、今日は差許す、以後は斯様を真似をいたす、喜左衛門驚ろいて、鼠舞ひをして這々の体で逃げ出して行く、扱一同の者は、平馬の腕前を感心いたえて、泰新ばかりに腕前出来る、其時に泰山和尚平馬を膝許へ呼んで、泰新ばかりに腕前出来る、其の許を出家にしやうといふお父上の御丁簡が分らさぬ、道れ武藏

宮 本 武 藏

打跳むれば敵は面部を包んだ怪しの武士、對手は一人の女小姓扱
は物奪り鬪見か不屈き至極の奴をり、荷物笠の上には、柄に
手を掛け詰め寄つたり、折しも有馬喜左衛門、車法にも平馬の後ろ
から切下ろさんとする途端、飛込み来た彼の武士、後手も見せず
エイと一躍浴せ掛けたる一刀は有馬喜左衛門を後ろ袈裟に斬つ
て落す、血煙り立って喜左衛門が倒れたので敵はアアと驚ろき足
並み亂れて相見へたり得たりと平馬は正面の敵を拜み討ち残る
奴等は雲霞と逃げて終ひまたまた武ヤレ、危うい所少年に似
氣なき御身の腕前、平コレハ、お武家危うい所をお助け下さ
れ、泰じけな所へ泰山和尚が出て参り、泰誠にお武家忝けない
お蔭さまで危うきを逃れまえてござる、武オ、是なる少年は御
僧のお小姓でござるか、泰如何にも愚僧の弟子でござる、武成
程、泰實は吉岡太郎左衛門殿、御次男平馬と仰えやる方で、武エ

宮 本 武 藏

「……聞て彼の武士大いに驚ろいた、武扱は天下に高名の吉岡
先生の御子息知らぬ事とは云ひながら御無禮いたまえてござ
る、斯申す某志は加藤主計頭清正の家來宮本武左衛門と申する者
實は諸國修業をいたした長門の萩へ來り志は新見の無二齋先生に
御教導に預からんが爲めいさ拙者と御同道いたさうと夫から宮
本武左衛門平馬と泰山住持と共に吉岡無二齋の家へ参りまえた
泰山は平馬を連れて内玄關より昇りまえた宮本武左衛門は玄關
に掛つて案内を請ひまする扱、取次ぎの若武士玄關へ立出でます
る加藤主計頭家來宮本武左衛門と申する仁、尋ね参つたる山を吉
岡老人へ告げますると、町噂にお通え申せといふので武左衛門に
洗足を出ますますと宮本は案内に連れて、太郎左衛門の一聞へ來
り、初めての挨拶をいたえて昌安寺村の小松原で御子息平馬殿の
働らきを吉岡老人へ物語りをいたしたまえた、太郎左衛門先生聞て

藏 武 本 宮

奥跡をさされる、泰山和尚が平馬を連れて出まえて一伍一什の物語
りをもて、泰是程腕前の出来る者を出家得道をさせるのは如何
にも無益であるから、どうぞ武藝者にまて敷き度ひといふ吉岡先
生は固より出家をさせやうといふ心でお在であさるから、何とい
つても御承知がない、泰山も中々承諾をましません、泰さうも
愚僧の弟子には出来ない、太以前の坊主にもて呉れると、双方頗
りに平馬の身の上を争ふて居ります、何を傍らに聞て居りま
たる宮本武左衛門、武蔵は老先生のお言葉も一々御尤も亦お住
持の仰せられる所も至極道理に叶つて居る、如何でございませう
某がまは未だ無妻でございまえて、勿論子供はござらん、出家に
たさうといふお心があらば此平馬殿を、何とも厚顔なきお願ひで
はござるが、此武左衛門が頂戴いたす事は出来ませうか、吉岡氏
聞て、太成程宮本先生折角のお望みでござるが、此平馬は某がま

藏 武 本 宮

の鑑識に叶はん所がある、其の許に差上げて宜いが、次第に依る
と宮本家へ統を附兼ねないに依つて、海一左様な事があつては申
え譯がない、武左衛門ニコリ笑つて、武夫は老先生の御心配御
無用でござらん、某がまが一子に頂戴いたす上は宮本家の相續人
でござるから、假令宮本家へ統を附やうが潰されやうが固より此
一條に就ては苦さうでござらん、下え置かれる思召あらはば武左衛門
取敢をいたさ度ひ

第五席

泰山が傍らから、泰幸ひの事でござるから、吉岡先生、宮本氏へ老
上げたらお宜さからう、家を潰されても統を附られても苦さうか
いと仰えやるのだに依つて、斯程腕前の出来る者を坊主にえた所
が無益でござるから、早速に宮本家へ養子にお遣はさあつてお宜
ま、太郎左衛門先生暫らく考へて居たが、太成程折角の御恩

でござるから然らば宮本氏へ差上げるといたさう 武全たく下
る置かれまするか 太一旦差上げると申えた以上は、太郎左衛門
決えて否とは申さん 武夫は忝けな、然らば唯々今項を仕つ
り度ひ直ぐささ戴き度ひ 太夫はマア少も待つて蔵から、菊の兄
を遣るのでも少も法のあるもので差上げるからには此平馬に
夫々手當をいたえて遣はさんければならん 武イヤ其の義は吉
岡氏、先生は御當家で三千五百石の大身、手前は小身でござるが御
子息を下え置かれるには着のみ着の儘で宜えいお手當は要らん
太御尤ももでござるが別に手道具等を遣はさうといふのではな
い吉岡流の傳授を遣はさうと存せる 武成程、イヤ御道理でござ
る茲で太郎左衛門が平馬に吉岡流の傳授をいたさ 太汝も一度
は出家得道をさせやうと存じたるが、泰山住持の御丹誠亦折宜く
も宮本氏がお出でにあり、其の方仕合せとえて宮本家へ養子に

る上からは宮本家の相續人と相成り、敢て養家へ紐を附る事無用
であるぞ 大切に大切を取る方であるから、平馬に悉く教訓をい
たされまえた、茲で武左衛門と平馬に親兒の盃をさせます、昌安
寺の泰山和尚も世話甲斐がありといふので、悉く喜こびまえて
昌安寺村へと戻りまえた、武左衛門は十日間逗留をいたえてさて
平馬を貰ひ請けて、肥後の國飽田郡熊本へ立戻りまえた
武左衛門は結構な養子を貰ったといふので、其の喜こび一方であ
りません、家中の者も武左衛門は修行中、長門の國萩へ赴き、吉岡無
二齋の次男平馬といふ者を養子にいたえ、其の腕前は天晴だとい
さを誇る位、亦武左衛門は養子の自慢ばかりとて居る、加藤主計
頭清正公是をお聞にあつて、清天下に隠れもなき吉岡無二齋の
悴其の平馬と申する者、予が目通りを申さ付けるであらうとの仰
せ、武左衛門有難く心得て、我が養子平馬を同道いたえて御前へ罷

り出でました

第六席

此時清正公より平馬お盆を賜り武藏政名といふ名前を下さ置かれまえた益々家中の評判益々宜しく然る所が宮本武藏正名我れを武藝者にはさせしといふ父無二齋夫を無理に出家を嫌って武士にあり武藝者になる上は何卒一流を編出さ度さものありと利支尊天に大願を盡み願はくば武藝の極意を授け給へど一心不亂に相成り所つて居りたまたる武藏一心通じたるにや或夜の夢に利支尊天猪の背に跨がり二人の童子を連れて出現たまえ左右の御手には右手に長き剣を採り左手に短かき剣を採り二人の童子を對手にえて猪の上を跨がり給ひ自由自在に童子を對手に二本の剣を振給ふ天地陰陽日月左右前後十字の切留り十八般の形を茲に使つて見せ給ふ宮本武藏夢の内に此の摩利支尊天よ

宮本武藏

り十八般の形を覺へまそる茲で武藏は人知れず二本の木劍を取て夢の内授かつた通りに形を使つて見ると實に心持ち宜く二本の劍が振れる尤ども此の宮本といふ方は右より左りが七分強い依つて二刀は樂に使へます其の嬉ささは幾許か然れば武藏は夢中に摩利支尊天より十八般の形を得て一流を編出たるが天下に其の名前を輝やかす人は別でございませす右の劍が二天流左りの劍が政名流左右合せて二刀流と申さする二本の劍を振る事を熟練まて居る

第七席

長門の國萩の新見にお残り相成りたまたる武藏の實父吉岡太郎左衛門最早御老年の事で氣分も大きに勝れませんから右馬頭輝元侯より五十日の暇を戴いて攝州有馬へ湯治に趣ひかうといふので有馬へ來りまえて池の坊に宿を取り身体の保養をいたま

またたが大きに壯健になりまたたから茲で長州萩へ戻らうといふので僕の善助を連れて立戻ります途中姫路草を求めやうと播州姫路へ立寄りまたた姫路の御城下若荷屋といふのに宿を取りまたた茲に一兩日逗留をいたし姫路の町を見物志やうといふ心算流石姫路はこの頃は豊臣秀吉公の甥御木下若狭守勝俊殿御高八十三萬石の城地であります然るに吉岡先生の家來善助は至ッでの正直者名前さへ善助といふ位で小供が好きでございませすから若荷屋の小供が誠に馴染で朝夕是を遊ばせて遣ります相變らず善助小供の手を引いて町中を諸方歩いて來ると一軒の家堀内から往來へ枝が出て青柿が鈴生りになつて居る小供の事であるから子伯父さん大層柿が生て居るせ那の柿を取つてお呉れナ善坊や那の柿は他家ので遊ッ柿で一ツも食べられないから今に伯父さんが良いのを買つて遣らう子其んを事をいは

ないで取つてお呉れよ善夫ぢやアア取つて遣らう石を拾つて善助が柿へ狙ひを附けてヤツと石を投げると石は柿へ的らないで木の間を潜つて庭の内へ飛で行く此家は何者の屋敷かといふに町道場を張つて木下家より五百石の扶持を戴いて居る佐々木賢東齋殿流の住居で丁度師範代の押田佐吉が今代稽古をいたし稽古着を脱いで盥へ水を汲せ顔を洗つて居る所へ右の石が飛んで來て押田佐吉の頭へ打附つたどんな劍術使ひでも下を向て居る所へ外から飛で來た石だから轉る間があいのでコツと頭へ當つたから押田佐吉驚ろいて堀の裾から見ると表に草履ばきで立て居る者がある佐吉聲を揚げて佐若武士衆堀の外に柿泥棒が居る捉まへさいと呼はれば善助此聲を聞いて善ソラ大變だとも子供を背負つて逃出す跡から若武士が大勢追騷て來る其の内に善助若荷屋の家へ飛込んで終つた跡から若武士が五六人ドヤク

藏 武 本 宮

這入つて来たが 武主人唯今當家へ子供を背負て這入つた者は
此家の召使ひか但老泊りの容か先生お庭の柿を取らうと石を
に押田佐吉先生の頭へ打附けたぞサア出せ主人は黙ろいて 主
私くまの所へお泊りのお容様か當家の者が存じませんが只今見
へません 武黙れッ見へん事はない當家へ這入つたに違ひない
愈よ出さんどあれば面倒だ此奴を擔いで行つて終へと遠慮會釈
もあらばこそ腕自慢の若武士若荷屋の主人を大勢で擔ぎ殿流の
屋敷へ連れて行つて終ひまえたサア是が爲め家内中の大騒ぎとな
り吉岡御老体昔見をえて居たが餘り家が雜踏をするからどうも
たのであらうと尋ねれば只今コレくでございまして女中の話
太夫はどうも大變善助……善助お呼ささると善助は家へ飛込ん
で子供を置いて臺所の籠の蓋に隠れて居る主人の呼聲に善助夫
へ出て参り 善へ何御用で 太何御用ではない善助其の方は

藏 武 本 宮

石を投り込んで来たのであらう 善左様でございまして當家の
柿が柿を取れくといひますから取つて遣らうと存じまして手
が狂つて石が庭へ這入りまえた 太夫は往かん十當家の主人が
連れて行かれて終つた宜えく拙者が貰つて來やう家内中を鎮
めさせ女中に吩咐て菓子折を求めて是を若荷屋の若衆に持せ細
身の大小鼈甲竹の杖を突いて佐々木殿流の屋敷へ出て参りま
て 太お頼申す……御免を蒙むるドレ……一人の門弟が出て
來た

第 八 席

取次ぎが出て見ると色の白い小兵を人品の宜い老人さんが立ッ
て居るから何れから 太コレはくお取次ぎ御苦勞にござる賢
東齋先生御在宿なれば宜えう是は甚だ失禮でございまして手
土産の印ばかり手前は吉岡太郎左衛門と申する者宜えうお傳へ

下さるやう「弟子は驚ろいて日本に二人はいといふので其名無二齋と、足利十三代將軍義輝公より名前を給はつたる大先生武遊社會に於て吉岡無二齋の名前を知らんものは早い早速奥へ道入り先生、只今吉岡太郎左衛門先生御尊來で是は手土産の印ばかりだと下し置かれまえた「巖流聞て驚ろいた 巖何で吉岡無二齋が来たであらう……」兎に角最と町裏に通せといふので、一間の内へ案内をいたえ茶を出え菓子を出え、寒い時分であいらから煙草盆あきを出えて待遇まする所へ巖流衣服を改めて夫へ出て参り巖「コレハ」吉岡老先生には宜うこそお尋ね下え置かれ千萬おけさいお尋ねを蒙むり巖流は手前でござる 太「巖流先生初うてお目通りをいたす、手前が吉岡無二齋でござる、今日伺つたのは餘の義でない、下拙家來が宿の若荷屋の作を同道いたえ、何か御内へ石を投込んだので、御門下御立腹に相成り、宿の主人を御當家

へお連れに相成つた由にござる、如何にも御立腹の段御尤もではござるがどうか御勘辨に相成らば忝けさい事に存する巖流少ゑも知らないのであるから 巖夫は「手前は少ゑも存せんが……」コレ「只今お話を承はつたが、何故左様な事をいたす、早速若荷屋の主人を返えて遣はす弟子も無二齋に謝まりに來られては面目まいに依つて、直ぐに若荷屋の主人は宿へ返えて遣りませた、時に巖流は傲慢無禮の奴だに依つて、是は宜い時に無二齋に面會をいたえ、是を機會に無二齋と一本立會をいたえ、幸ひに此梅干爺を打込んだら、我が名前も天下に響き渡るであらうと心の内に考へ 巖「さて吉岡先生幸ひの御目通り、何卒一本のお手合せを願ひ度ひものでござるが、如何でござらう」無二齋は巖流に立合ひを好まれるのが忌だに依つて、今まで若荷屋に泊つて居ても人に知れあいやうにえてお在であすつたが、武藝者の事だから立合

宮 本 武 藏

を望まれると嫌だといふ譯には往かん併え斯んも物と立合ひ、
て意恨を請けては詰らんと思召えたから 本御尤ともあるお望
みでござるが老年に及んで無二齋の對手にも相成るまい、殊に身
体悪く老て御主君よりお暇を戴き有馬へ湯治に参つた戻り掛け
私く老に立合ふ譯にもならず主人の許を請けなければならん
に依つて何れ亦其内に御縁あらばお手合せを願ふ事にいたさう、
斯ういッたら巖流がさう手億勤であるなら、亦願はふといふであ
らうと思ふに依つて休裁宜くお通げなすつたが土壘巖流は上見
ぬ怒の振舞、大天狗の奴だから 巖成程御尤とも千萬主の許を
請けんければ手合せが出来んと仰せあるれば、拙者も是より御
主人へ願ひますから、老先生も御主人へお届けの上、お手合せを
願ひ度ひのでござる、斯ういはれると、夫でも出来まいといふ譯に
はあらんから、止む事を得ず無二齋先生、承諾をいたして若荷屋へ

宮 本 武 藏

立戻り書面を認め善助に持せ、長門の萩家老の穴戸、花房兩名の許
へ是を申送る、吉岡の書面を見て兩人早速に大守毛利輝元公の
御前へ出て、右の次第を申上げると、輝元公大いにお怒り遊ばえ
て 輝憎くも賢東齋の願、速やかに其方でも姫路へ下向をいた
え美事無二齋に巖流を打負えて立歸るやう、立合ひを許さ遣はす
ソコテ穴戸備中、花房志守輝元公の仰せを蒙り、大勢の家來を
連れて長門の萩より、播州姫路へ乗込んで参り、若荷屋へ到着をい
たえまた

第九 席

此方は佐々木巖流、木下若決守殿へ吉岡無二齋と手合せの次第を
お届けに及ぶと、固より愚將の木下勝俊殿、巖流より外に武藏者は
まいと思つて居る方だに依り、手合せをいたせといふので、速やか
にお許えになつたるから、支度をいたえ待つ所へ、毛利家から穴戸

蔵 武 本 宮

花房が乗込んで参り木下家へお届けに参ると毛利の両家老が乗
込んで参ったのであるから若狭守殿の家老木下將監といふ者が
自身に若荷屋へ赴き、穴戸、花房に對面をいたる。將、御兩所には此
度遠路の所當地へお乗込み御苦勞千萬、巖流儀にいたえて要で
もない立合ひを吉岡先生に望み、お氣の毒の段お察え申す、就て御
城内へお供をいたえませうか、但し當家に御一宿をなさるか、と尋
ねた時に穴戸備中が、備木下氏のお言葉千萬忝けない御城中へ
罷り越え、要なき事にお手厚あるお待遇に預かるも心苦まければ
此儘當家に一宿仕つるでござらう。將、然らば御隨意に……と、木
下將監は是より立戻り、万事將監が係りで穴戸、花房に夫々待遇を
させます。城内へ來おいかるといって構はせには置けません、茲
で龜山といふ所へ矢來を拵へまえて此内で立合ひをさせやうと
いので、両方へ幕を張り機敷を拵へ見物勝手次第といふのであ

蔵 武 本 宮

るから、近郷近在奮って此立合ひを見に参る扱當日に相成ると巖
流は天地人の弟子を連れて、其場に出張をいたえます。第一番に
澤田空左衛門、押田佐吉、青山文平といふ右の三人、幕の内に扣へて
居ります。此方に吉岡太郎左衛門、幕の内の床机に掛つて居るお機
敷には木下若狭守勝俊殿、家老木下將監、毛利の家老穴戸備中、花房
志摩守、其他木下家の重役、ブツツと並んで勝負如何にと見て居り
ます。左右する内に時刻來つて太鼓を打ち、幕の内より立出でたる
佐々木賢東齋、巖流切下げの頭は後ろ鉢巻、黒の袖に四ツ目結の五
所紋、仙臺平茶の華鬘の袴、股立ちを高く取上げ、跡先き二尺五寸、前
前八寸、總体三尺三寸、肥前の國大村産を始齒に削上げたるのに、鉄
の丸鐙、打つたる木剣を提げて夫へ立出でる。吉岡太郎左衛門無二
齋先生は茶の龜綾の拾小倉の袴を穿き、また短かい木刀を取つ
て、是も袴鉢巻の支度で夫へ立出でる。數多の見物、矢來の外に在つ

宮 本 武 藏

てアアアアアの聲を揚げます。巖流は大兵なり吉岡は小兵であ
ります。互ひに黙禮をいたさ、お手合に「エイッ、エイッ」といふ氣
合と共に左右に開き、巖流は星眼に木劍を直ち吉岡の様子を見る
に太郎左衛門無二齋、左りの手は袴の腰に當て、右の手にて「ッ、ッ」
と星眼に附ける。鶉の毛で突いた程の隙も無い。日本名代の吉岡無
二齋、巖流心中に成程、美事な腕前だ。一流の指南をする程の賢東
齋、ゆゑ對手が見へる。吉岡は巖流の様子を眺め、心中に「是さきの腕
前を自慢に、三界一無敵流などいふ流名を命け、勝手我が儘の振舞を
する、片腹痛い奴だ」と思召さ、懲戒の爲め負して遣らうと、「ッ、ッ」
と附込んで来る。年を老ても其術に渡つて居る方ゆゑ氣合で賣
られるから、巖流は自然と腕れが參る。「ッ」と一聲氣合を討つて吉
岡無二齋、飛込んで来た。早い事、眼にも止らず、賢東齋の右の小手を
側かに打つた尋常の者に打れたのでは無い。名人の吉岡に、小手を

宮 本 武 藏

斜に打たれたから、總身へビリ／＼と響き思はず、巖流腕の袖が震
んだ。るか木劍をガラリと夫へ捲落され、巖流「一本も合
せない」といふ美事を勝負見物、一同矢來に捉まり、閑の聲を揚げて、
巖流を罵ります。する亦は吉岡を賞める、花房、共戸の兩人は、棧敷で
見物をえて居たが、態ア見ろ小兒の如くである。と鼻隆隆々どまて居
る、木下將盛は巖流の負たのを見て、宜い氣味だ。態ア見ろ馬鹿野郎、
何といふ負け方だ。と常々巖流の傲慢を憎んで居るから、堪らぬい
第 十 席
流石に御最負でも、木下若狹守、巖流の負け方が飽氣ないので、赤面
をいたさ、また、扱、共戸花房の兩人は、吉岡を連れて一旦若荷屋へ
引取り、木下家へ暇乞ひに及んで、「ソコ」に長門の萩を差えて立
戻り、また、時に巖流は満座の中に、耻辱を請け如何にも残念であ
るから、木下若狹守殿御前へ出で、巖流拙者未熟にいたさ、吉岡無

宮 本 武 藏

二齋に打負けまえてござる願はへば三年のお暇を頂戴なま武藏
修行の上吉岡無二齋に勝る腕前になつて立歸りまするに依りお
聞濟みに預かり度ひと明らかか眼を貰ひ屋敷は澤田、押田、青山の
三人に頼んで是から播州姫路を發足に及び、賢東齋諸國修行とは
眞赤を偽り、一直線に長門の國萩を望んで乘込んで來たのは意恨
重なる吉岡無二齋を討つて我が無念を晴さうといふ倭姦根性の
巖流尤も此賢東齋といふ者は前名を六角甲斐造と申えて塚原
卜傳の弟子でございませす師の卜傳先生が丹誠を凝えて教へて道
りまえたので當人の腕前も段々上達をえて一人前の武者に取
立て遣らうと卜傳先生肩を入れて居た内に、二十五才の時に此巖
流が六角甲斐造の昔を師匠卜傳の前に、誓を刻て 甲私くまはモ
ッ武者が嫌になりまえた是から諸國を修行いたえて兩親の誓
提を吊らひ法師になる心得でございます今まで御厚情に預かり

宮 本 武 藏

まゑ九が御機嫌宜まうと弟子の方から師匠へ坊主にかるから
破門をえて呉れといふ心得違ひの奴流石塚原卜傳も今まで仕込
んで通ばれ武藏の方では一人前にかつたのだが坊主にかるとい
はれれば夫までの事であるから止むを得ず六角甲斐造に暇を道
りまえた師匠卜傳の前には坊主になるに己れが勝手に縁を絶て
成程頭丈は坊主にあつて師匠卜傳を後ろにえて是から武藏の
修行をえて歩く内に、頭の髪が伸て参ります其修行中に六角甲斐
造或日長旅の疲れに、土手岸の小川の邊りに柳の大樹があります
る夫へ腰を掛けて水面を眺んで居た所が宜い心持ちに相成つて
ウツラくと睡眠を催えて居りますと己れの頭へハラ一と
障ツた物があるので甲斐造ハフと心我れに返り、氣を取直して入
方へ眼を配つたが何も居る譯ではない、氣が注いで仰向くと柳の
枝が垂れて居るのが、我が頭へ當るを甲斐造熟々眺め 甲成程武

藝の悟りは此所等花風に打たれて柳が下り我が頭に當つたのか
と茲で我が名前を佐々木巖流と改めまゐた一説には早柳と申え
まするが併も武藝小傳を調べますると宮本武藏政名巖流を撃つ
といふ事がございませぬ、シテ見れば巖流が全たぐでありませぬ、東
齋と齋號を命けまゐて佐々木賢東齋巖流ト傳流では若老師匠探
原ト傳に聞かれた時に面倒だに依つて、巳れが勝手に「三界一無敵流」
といふ流名を命け諸國を修行いたえて居る内播磨の姫路へ來り
木下若狹守に語らひ五百石を貰つて上見ぬ鷲の舉動で居た所へ
此度吉岡無二齋に負たのであるから己れの藝道の拙なるを願ひ
す、無二齋を恨んで討取らんと長門の國萩へ乘込んで來たのは賊
に「簡達いの奴、併も講談師の爲めには斯る「簡達いの巖流があ
るから讀物も出來まする、善人ばかりあつては講談師の賣物はと
ございませぬ、悪い奴もあるから讀物が出來る何方かといへば悪人

は講談師の爲めには結句米櫃でございませぬ、亦酒が好きで女郎買
ひが好きで道樂者が出來ますればこそ、落語家社會の米櫃もあり
ますやうな譯でさて、佐々木巖流は吉岡無二齋と尾狙つて居りま
す所が太郎左衛門は毛利家で番頭役を勤め食祿三千石、一權式あ
る方でございませぬ、戸外へ出るにも大勢の家來が附かあけれ
ば出ませぬ決えて一人で出るやうな事はないかと巖流は無二齋
老体の様子を油斷なく窺つて居りまゐた

第十一 席

時に九月十三夜後の觀月昌安寺村の昌安寺に於て十三夜後の觀
月に碁の會があるので此會へ趣き夜中になつて急に戻らなければ
ばならん用事が出來たので是から善助を供に連れ提灯を點けさ
せまして鼈甲竹の杖を左手に突いて絹細の合羽に高足駄を履い
て昌安寺を立出で、松原を過ぎて土橋へ掛りました、スルト吹來る

風の爲め提灯の燈火が消れたから 太、コレ善助、燈火が消れた一寸昌
 安寺へ行つて借て来い、此所に待つて居るから 善、畏こまりまし
 た身分のある方は月夜でも決えて無提灯では歩きません、谷めら
 れるのが忌であるから月夜でも暗夜でも提灯を點けて歩きます
 昌安寺へ行く方が近いから善助に燈火を借りて道り跡に残つた
 吉岡老先生、兵一人土橋の上に行み此先きは萩の小路、兩側一面に
 萩が植つて居ります
 今を盛り、の萩、雨に打れて濡色が月に照り、實に其様得もいはれず
 太郎左衛門、月を眺め 太、ア、美事なる月なり亦此月の照りが萩
 の盛りに映じいふにいはれぬ風情かなと獨り打笑み萩の盛りを
 眺め、月を眺めて居る時に筒音高く一發、ズドーンと飛來る彈丸に
 吉岡先生、大膽より胸板へ撃たれ 太、ア、ッ……と吉岡老体、大劍
 の柄に手を掛けながら土橋の上へ仰向に倒る所へ、スックリ立出

でたる賢東、齋藤流短銃を右に引つ提げ、裾を高く端折上げ 巖、態
 ア見る老、意恨の程を思ひ知れと鉄砲を左手に短刀を引抜き吉
 岡太郎左衛門の倒れて居る咽喉元へ突き掛け、血を拭つて袖に納
 める所へチラ／＼見へる提灯と大勢の足音に、南無三寶と一直線
 に萩の小路の方へ逃去りました所へ來つた若武士と善助を見
 て、悉く驚ろき二手に別れて昌安寺と吉岡の屋敷へ注進、伴主水
 泰山住持を始め現場に來つて太郎左衛門の横死を歎きました、が
 扱いたる方もございませぬ、城内へお届けをいたる御檢視濟みの
 上、太郎左衛門無二齋の死骸を引取り、手厚く葬ひらせて右の趣き
 を熊本へ通達する事になりませぬ、此方は肥後の國熊本に在つて
 主に忠養、父に孝を盡えて居ります、吉岡平馬事、當時宮本武蔵政
 名阿蘇ヶ嶽明神へ參詣をしやうと、天正十八年九月十五日、儀を運
 れて阿蘇明神へと出願します、熊本より阿蘇ヶ嶽明神までは十

里餘りの道であります。自宅を立出で武藏政名家來と話をしながら、四五丁來ると武藏者にあるまじき事で石に頭を打ち、武藏は左りの親指を痛めます。僕、どうなすった。若旦那、政、イヤ、どうも不覺悟千萬な事で、平地を歩いて居るのに石に頭づいて、少々爪を痛めたやうだ。僕、夫りやア大變、マア、お待ちなさい、手拭を破つて足の親指を結びました。政、私は今日參詣を止めて歸らう。僕、左様ですが、政、止さうよ、神詣での出駈けに怪我をするやうな事では何にか、我が身に障りがあるのだに依つて、斯様な時に參詣をいたしお叱りを請けてもならんから歸らう。僕、然うですか、い夫ぢやア、マア歸るとしませう、僕を連れて熊本城へ立歸つて參り。政、只今戻りました。武、どういたした武藏、大層早かつたナ、未だお前はモノ二三丁行つた位だが……政、左様でございませう、四五丁參ると不覺悟千萬にも石に頭づいて左足の親指の生爪を割

しました。武、成程、イヤ夫はナ必らず武藏者だからといつて、平地で頭かんとは限らん、幾ら覺悟いたして居つても時の災難是はどらも遁れる事は出來ん、大難が小難、マア、然ういふ時には止した方が宜からう、ソコ薬りを附まして武藏政名は指の療治をいたしました、然る所へ長門の國萩より書面到來をいたします、武藏が抜いて見ると、這は如何に、實父吉岡太郎左衛門無二齋萩の小路に於て鉄砲に的つて落命いたし、其當の對手は証據はあしど、雖も播州姫路の龜山に於て立合をいたえ物の、美事に打負した彼の賢東齋巖流に相違ない、至急武藏に一度國表へ戻るやうにといふ兄主水からの書面、武藏政名大きに驚ろいて武左衛門に此物語りをいたえますと、武左衛門が、武、夫は意外の猪事、元來賢東齋巖流といふ者、武邊社會の憎まれ者、彼の姫路表の立合は武邊社會に於て知らん者はない了、簡の間違つた巖流であるから、必らず實父

宮 本 武 藏

を討つたに相違あるまい早速長門の謀へ立越へて兄主水に様子を伺ひ實父の敵巖流を討取つて宜からうといふので、茲で宮本武左衛門が願書を認め、家老の加藤與左衛門へ附いて差出しますると加藤與左衛門から彼の願書を宮本へ下げます直ぐに押返して願書を出すと、亦下げられますソコで宮本親子がどういふもので加藤與左衛門が願書を取上げて呉れないかと相談の上で與左衛門方へ出向きました

第十二席

宮本武左衛門が加藤與左衛門に對面をいたる武早速御家老伺ふが、どういふ譯で願書をお取上げにならないのでございませうか尋ねた時に與左衛門が、奥夫は宮本氏、其許にも似合はんではないか敵討ちの願書を差上げて御主君よりお暇は出まい何故かといふに宮本武藏は一度吉岡家を破縁いたして今は宮本家の相

宮 本 武 藏

續人、然らば當家の家來貴所の忤、然れば與吉岡の縁は表向き絶れて居る、然るを實父の仇討ちを仕度ひといつて願ひ書を出してもお用ひにはなるまい、武術修行と文面を改めずんばお暇は出まい、武成程、御尤も千万、我々の氣の注かん所、忤けなしと立歸つて武左衛門我が兒武藏に其話をいたします御尤もなる御家老のお言葉、お情けの程有難しと是より願書を認直ましまして加藤與左衛門に附て願ひます、加藤與左衛門直ぐに清正公へ彼の願書を差上げる、時に清正公願書を披き見ると未だ腕前不鍛練であるに依つて、武術修行をいたし度ひから兩三年お暇を戴き度ひといふ、早速宮本親子を呼べとあつて、武左衛門と武藏を御前へお招きに相成りまた、兩人平身低頭をして居りますと、清如何に武左衛門其方の養子武藏腕前未熟であるに依つて、武術修行をいたさうといふは感服の至り、速やかに清正暇を遣はすであら

蔵 武 本 宮

う……「コレ武蔵其方いまだ下年未滿にいたえて腕前未熟であるから修行をいたさうといふは宜き心掛け早速暇を遣はすであらう去りながら修行中に金子に差支なば予が差圖いたして置くに依つて池田福島淺野黒田まつた加藤左馬亮細川此者どもの屋敷へ参り宮本なる事を申し入れなば旅費に差支あきやう取計ふに依つて左様心得随分丹誠を凝し修行をいたし適ばれ腕前上達いたして立戻れ是を其方へ遣はすであらう何國何地に於て孤狸妖怪に出逢はんものでもない其方の守りといたせとあつて傍きにお置きになつた山城の國京師の住人來左衛門國次の二尺三寸古今の名刀を下し置かれまするコレ宮本親子の爲めに有難きお言葉諸國を修行中病煩ひで金子に差支へ其時には何所へでも願つて出る旅費等に差支ないやう清正から豊臣七人の荒大名斯ういふ人達へ頼んで置き我が家來宮本武蔵といふ者武術修行中若し

蔵 武 本 宮

願つて出たら清正より返金いたすゆゑ一時立替て置いて貰ひ度ひといふ事を依頼する然れば何國何地に居るとも武蔵は氣丈夫でありませぬ道中へ出て旅費に差支るやうでは逆も敵討ちなどは出來ませぬ是では武蔵何所へ行つても金に差支はない實に本人の身に取れば有難い殊に清正は武術修行といふは名のみにあつて其實は實父吉岡無二齋の仇討ちをするといふ事は御存じ依つて來國次の名刀を下さ置かれますたので君前のお暇請ひを細やかにかたえて愈よ出立の時には清正公の家老小代下總加藤與左衛門木村又造井上大九郎是等の人々家老達が集つて二百兩といふ餞別を武蔵政名に呉れました

第十三席

然る所兄の主水は病身あるを残念に思ひ或時自殺を遂げました仕方がないので武蔵兄の初七日を濟せて一度播州姫路の御城下

蔵 武 本 宮

へ乗込み巴屋といふ宿屋へ泊り巴屋の主人の世話で、姫路城内の組の足輕頭牧野惣八に引合せ肥後の國阿蘇ヶ嶽の神職の三男瀧本又三郎と偽名を名乗つて宮本武藏政名が新参鳥組足輕に住込み敵賢東齋巖流の立歸るのを待たうといふ心底足輕頭の牧野惣八が惣時に瀧本お前は新参足輕に我々の仲間へ道入ッたが道入り早々に散財を掛けて氣の毒だけれども三貫ばかり散財を志して貰はなければならん事がある夫もお前ばかりぢやアない新参足輕は皆散財を志して居るのだから政成程夫はお頭お易い事で何をいたえまするので惣然れば足輕の仲間へ道入ッたといふ振舞ひを志して貰ひ度ひ皆名々やつて来たのだから政結構でございませす三貫で宜いのでございませすか惣ア、三貫あれば十分だ政左様なれば何分願ひまする茲で宮本が三貫出えて頭のお野惣八に渡す是から蕎麥酒或は魚亦是蒸菓子等を大層買求め

蔵 武 本 宮

また足輕一同を招いて懇親の振舞皆集まつて大に瀧本御馳走でございませす大きに瀧本が馳走様だとツラリと一同並びませた政御一統様甚はだ失禮だが御惣くり召上つて戴き度ひ各々喜こんで御馳走にゐる中に一人壁に死掛り「アッ」と歎息を吐いて居る者があゝから政如何でございませす貴所召上つて戴き度ひもので御酒は往けないのでございませすか○ナニ瀧本拙者は酒も飲れば甘い物も往けるがね些々と胸に塞へて居る事があるので政何でげす○外ぢやアないが拙者は今夜は姫路のお天守番だ政成程○故ゆゑに我れは頂戴が出来ないのでだ政其お天守番といふのは各々一度宛廻つて来るのでございませす○然うとも今に瀧本お前の番にゐるよ政左様から斯様いたえませう貴所の今晚お勤めにあるのを私くえが参りませして私くえの番の時に貴所に行つて戴くと志して今晚は御惣くり茲で召上ッ

宮 本 武 藏

たら宜きうございませう。○成程然うあると拙者の方は十分のやうだが、瀧本お前には氣の毒だ、御馳走をえたり他人の當番を勤めてやったり、拙者は十分過ぎるが、公に氣の毒が。政ナニ些ッとも氣の毒な事はございませぬ、各々一度宛は廻つて来るので、早晩はやかれ勤めなければならぬ、拙者が行きませう。○夫ぢやア、瀧本さうもてお呉れ然う事が極れば十分に拙者御馳走にあらうかね。政さうか宜きう召上つて下さいます。一同が聞て氣の毒でね、瀧本、散財をさせて這入り早々お天守番をんと勤めさせ、政さういたゑて行つて参ります。未だ早い、日が暮てから行つて宜い。

第十四席

十分に暮れ渡りますと武藏、政名は支度をいたゑて、兩刀を帯え、姫路の天守へ乗込み、まゑた、一番下の所にボンヤリ燈火が點て居

宮 本 武 藏

る所へ武藏は座を構へて、夜の明けるときで居りまゑたが、何事もい夜が明けてから足輕部屋へ立歸つて参りまゑた。夫から後は武藏、足輕達へ望みに任ゑて二刀を教へて居りまゑた。或時木下若狭守勝俊侯御前体にて、和漢の英雄豪傑の物語りの出まゑた時に、我が居城姫路の天守であるが、臣等にも度々物語る如く、既に太閤姫路本城天守の頂上へ人を禁じて上げ玉はず、何者か姫路城五重の絶頂を見届ける者はあるまいか。時に御前に居た若武士顔の色が變つて、誰が見届ける者があるものか。木下將監進み出で、勝只今の仰せ御尤も、おれども、應病未練の若武士中々天守見届けをよ、いは思ひも依りませぬ。鳥濱がまゑくは候得とも、御當家身組新參召抱への足輕、瀧本又三郎と申する者に、天守絶頂見届けのお役、仰せ付られて然るべし。勝左様、然らば其瀧本又三郎と申する者に、申付けらるであらう。將監宜きに取計らへ、この上意、木下將監

喜んで御自分の小屋へ瀧本又三郎至急用事あれば罷り出で、といふ御沙汰頭が是を聞いて「ハナナ瀧本何だか知らん、元老から至急用事あれば出るといふ殊に依ると元老が瀧本お前の三又流を稽古もやうといふのだ、屹度夫に相違ない足輕頭牧野惣八が同道をえて將監殿お小屋へ出まえた、木下將監が將監を惣八、瀧本又三郎といふのはどの仁であるか、將監は知つては居るが空囃いて尋ねると、牧野惣八が惣エ、恐れながら元老、是に召連れまえた、るのが瀧本又三郎と申する者でございます、將ア、左様か……」下拙は將監であるが逢ふのは初めて時に瀧本又三郎の儀では、あいが御當家姫路の天守、未だ五重の絶頂を見届ける者があいに依つて是を其方へ申付け、天守の頂上を見届けて立戻れ、然すれば夫を功に取立ッて遣はすから、牧野惣八、戦慄をて驚ろいた、瀧本止まると、断はッて終ひナ、どうもてマア天守へ登れば命ちが

あいな早速お断はり申え上げ、瀧本マコリ候ッて政元老の仰せ有難き仕合せ身不肖ながら瀧本又三郎速やかに見届けまゐる、でござらう、將イヤ夫は重疊至急頼むぞ、牧野惣八秘ろいて惣、何だい瀧本見届ける仕様が、あいな危ないよ、行くかい、政、早速支度をいたえて登りませう、是から足輕部屋へ立歸り、支度を整へて、下へは真綿を疊んだ肌襦袢を着用を、身軽く扮装して、小刀は山城の國の住人綾小路貞利一尺八寸、大剣は來左衛門國次、日釘を取替へ、鯉口を寛めて、さて姫路の天守に近付き、此播州姫路のお天守といふのは、天正九年羽柴筑前守秀吉公、中國探題、職に相成る時に一城を築き、天守を築かんとする時に一つの森あり、其内に社あれば、秀吉お尋ねに相成ると、小坂部大明神とえてある、秀吉公近傍の土民を招き、是に小坂部明神とえてあるが、何を祀りたるや、どのお尋ね、誰あつて答ふる者なき中に、老人一人進み出で、

藏 武 本 宮

さて恐れながら是に従前河古川の主人足利の執権高野武藏守師直の息女小坂部姫と申すのが師直の小姓采女と申す者と密通あり、然るに事露顯をいたえて采女は當地へ來り敢なく此所に死去いたえまする、然るを小坂部姫采女の跡を戀慕ひ流れ流れて當地に來り采女の最期の事を承はり大いに歎き遂に采女の墓前に於て敢なくも最期を遂げられまえた夫を里人氣の毒に思ひ、采女の塚を發掘て其中に小坂部姫を共に埋葬いたえまえた是から小坂部大明神と崇め上げますと斯う申え上げたる時に秀吉公尤ども千万身分の高いも低いも區別のなさは戀の道あり、いざ然らば速やかに此所へ天守を築かんと、是より彼の森を打碎き、人夫を掛け足場を組せるに、不思議にや大風吹起り、忽ち人夫を掛じ足場を碎く、秀吉憤然と怒つて再度足場を組せ、万物の靈長たる人、何ぞ明神に誑かされんやと怒り、然るに其夜秀吉の枕邊に小坂部

藏 武 本 宮

姫現はれ、我が靈魂を祀り呉れよといふ夢を見て、秀吉公遂に姫路の五重の天守を築き上げたる後、天守の頂上に小坂部大明神と祀り奉まつり、迺ばれ金銀を費え美事に秀吉公、此所に小坂部姫を祀りまする、其後此天守の頂上へ人を禁じて上げません、秀吉公繩張り、の城であるから、疊の心は總体半段で、一番下が千疊敷き、二重目が八百疊敷き、三重目が六百疊敷き、四重目が四百疊、五重目が二百疊、此五重の天守は常に白雲梯の腰を巻といふ位、高い天守でございます、います、誰あつて此頂上へ登る者があひ、然るに此度木下將監の願みを請けて宮本武藏政名只一人剛膽の人だに依つて天守見届けに参り、二重目まで來ると武藏の顔の前を横一文字に突つ切て行く者がある、大概の者なれば膽を潰すが剛膽を武藏だから身軀を透ちて彼方を見て居たが、政ハ、ア、扱は編蝠だナと宮本は見切りまえた、三重目の所へ登つて來ると道は如何に縁を離れて居

藏 武 本 宮

る中段でパツと燃上る火の光り 政ハ、ア不審やナ、縁を隔れて
陰火が燃る武藏身体を屈んで下から見ると中途に火が燃へて居
りますきりで四邊は森々寂寥眞暗がり

第十五席

武藏此様子を見て 政ハ、ア扱は狐狸の類ひか、成程、太閤人を焚
じて當天守へ登らせ給はざれば必らずや狐狸の類ひ其處に附込
んで悪業をすると覺へたり何條何程の事やあるか、と宮本は恐れ
氣もなく進んで來ると不思議や火は何時しか消失せまする四重
目へ掛つて來ると俄かに耳朶に響くはゴッゴツと家鳴りがする
かと思へばガアラガラ、と石が降つて來る、武藏は臆の落附い
た方だから騒ぎも遣らず 政ハ、アサマ、の悪業を仕くさる
ナ、陰氣を見せて石を降らせる音の聞ゆるは是ぞ狸の業にあらす
正しく狐か山猫の業なりと武藏は勘注さまする、狸に石を降らせ

藏 武 本 宮

る術はございませぬ、狐五百歳にゑて白狐とあり、宜く雲を呼んで
雨を降らし雷を起して自由自在の業をする山猫五百歳にして逆
闇となり是も雲を呼び雨を降らし雷を起します、其術は廻闇にな
れば出來ます、猿五百歳にして非々となり是は人間を取喰ふの術
はあれど、雲を呼んで雷を起といふ術はございませぬ、武藏堅固の
宮本政名若冠ながら、万巻の書を読み見て居るから、是は狐か山
猫の業だ、と見切りを附けました、四重目から五重目へ昇つて來る
時は、天正十三年冬十月の事、おれば森々寂寥として物凄く眞暗が
りの五重の天守正面に小坂部大明神を安置仕奉つる、銀の幣束は
ガラ、光つて居ります、其前に來つて武藏政名いでや變化ござ
んなれど、來國次の大剣を左りに引附け、右には小刀、綾の小路の廻
口を切つて武藏は体を固め八方へ眼を配り、心を配つて扣へ居り
ます、モ、何時であらうかと思ふ内に、アラ不思議や武藏の前に

宮 本 武 藏

忽然と現はれ出でたる一人如何に男子面を上げよと呼はる聲に
宮本武藏屹度打見遣れば十二一重に緋の袴透々眉の薄化粧頭髪
は中すべりといふ下げ髪申し上げるまでもないやとき御方様の
お頭髪は大すべりといふのに取上げまする其他の者には大すべ
りといふ髪には取上げられません今是へ現はれ出でたるは官女の
姿中すべりといふ頭髪にて善哉く「妾は小坂部明神なり人恐怖
れて登らざる五重の天守若年の身を以て見届けんと登り来りし
志ざし適はれなり併る凡体を以て當天守の頂上へ登り妾の面前
を蹴さんとする其罪輕からずと雖も忠義の志ざしを思ひ今宵は
差許さ遣はす以後は決えて相成らんぞ亦今宵天守を見届けんと
て登り来りも其剛膽威心あり伏つて是なる劍を其方へ遣はすニ
疑ふ事勿れ」と箱に入れたる劍一振下し置かれる宮本政
名刀箱を拜領して 政實に有難き小坂部明神のお告げなり」と恐

宮 本 武 藏

とく喜こんで夜詰めをして居りまた所が何事もなく東が白み
まする櫓の頂上で夜が明けても未だ里は暗うございます、茲で朝
日の登るのを見て、宮本は神前の廻りを見届けて櫓を下つて参り
ました、さて天守を下つて木下將監の小屋へ参り 政昨夜夜詰め
を仕つりまたたる所何事もございません、夫に就て小坂部明神よ
り、斯様な劍を頂戴いたたましてござる、早速お届け申上げる、木
下將監が見ると、慥かに覺へある刀箱蓋を拂つて中を見ると、太閤
殿下より當木下家へ對してお預けに相成つたる金の象眼にて飛龍
丸と銘の這入つて居る郷の義弘の劍、ハテ不審やと木下將監刀箱
を請取り 將追つて沙汰をする、と瀧本又三郎を足輕郡屋へ返さ
直ぐに登城をいたえて、木下若狭守殿へ 將昨晚瀧本又三郎に申
し付け、天守見届けの役をさせましてござる、夫に就て瀧本又三郎
儀、小坂部明神より斯様くにして劍を拜領いたしてござる、併し

宮 本 武 蔵

御當家御寶藏に秘めある飛龍丸に寸分違はず早速我藏係へ仰せ
付られお檢めあつて然るべし是から木下侯から仰せがあつて寶
藏係り寶藏の内を調べると道は如何に太閤殿下よりお預りに
つた飛龍丸郷の義弘の刀箱くるみない

第十六席

寶藏係りの者大いに驚ろき急ぎ此趣きを勝俊侯へ言上に及ぶと
若狭守殿憤然としてお怒りあつて勝扱は足輕瀧本又三郎不届
きにも我が家の寶飛龍丸を奪ひ取り隠すべき所がなきゆゑ小坂
部明神より拜領をしたりと偽りを構へる速やかに召捕へて罪科
に行なへと悉く御立腹木下將監是を聞て將御尤ともある
お怒りでござるが下拙少しく合點の參らん所がある瀧本又三郎
に限つて賊を働らく者ではござらん其れ故奈何とあれば彼れは
新參召抱への足輕でございます御寶藏が何所にあるか亦御寶藏

宮 本 武 蔵

の内には御當家の寶何々の寶があるや知るべき謂れはございま
せん是には何か仔細のある事と相見へます暫らく將監へお任せ
下し置かれまするやう勝成程然う申さば將監尤ともであるが
今亂國であるに依つて事に依つたら瀧本又三郎といへる奴敵國
の間者なるやも知れんに依つて油断いたす+兎に角罪科を遊し
て揚り屋入り申し付けるであらう茲で木下將監が小屋へ退つて
から瀧本を呼んで將實は那れなる劍は御當家の寶物夫を小坂
部明神より拜領いたしたといふ其儀に就てコレく如何にも其
方へは氣の毒であるが揚り屋入り申し付けるやうなもので此將
監眼の黒い内は決して其方へ不自由ある事はさせんに依つて左
様心得る政元老の仰せ如何ばかりか有難く下拙督つて賊心は
ござらん木下將監が請合つて揚り屋入りになりました所が足輕
部屋に居るから見ると却つて樂だ將監から三度く美味物を下

宮 本 武 藏

さるし、運動は附くし、唯戸外へ出てブラ／＼歩けない丈けで、宮本は樂な身の上、然るに足輕どもは一同相談をして、甲「どうだいマア瀧本は酷い目に出逢つたナ、乙「然らさだから瀧本止せば宜いのに詰らな、真似をするから其んな目に逢ふのだ、甲「併し元老が亦瀧本を大層御最負だからナ、丙「然らういへば此間瀧本に逢つたよ、大分肉が附いて平氣の平左衛門で、足輕部屋に居るより此方が樂だといッて居た、甲「ナニ同役、樂ぢやアなからうよ、丁「併し御同然に縁あつて足輕部屋へ來たのだから、信心をして瀧本の疑念の晴れるやうにして遣らう」と其所は皆持つ持れ、朋友の間がらだから、牧野惣八始め宮本の疑念が晴れるやうにと斯ういふ心得で瀧木が可哀想だと、寄ると集ると此評判ばかり、然るに家老の木下將監は彼れに宮本だといふ事を一言いはせ度いと思召し、折に觸れては來て他所ながら尋ねて呉れる、揚り屋をへ家老が來

宮 本 武 藏

るといふのはないが、罪人のやうで、罪人でないから將監が目を掛ける、夫ゆゑ木下家の若武士も瀧本に目を掛けて遣ります、左右する内に入り三年を経ます、天正の十八年、十九年改元あつて文祿元年に相成りまして、賢東齋巖流播州姫路へ三年目にして立戻つて参り、木下若狹守殿へお目通りをいたして、日本中修行をなし、吉岡無二齋に勝る腕前になつて参つたといふので、相變らず傲慢な事をいひ散らし、上見ぬ、怒の振舞、木下將監は如何にも小癩に障つて堪らない、若武士の中にも巖流の傲慢を憎む者もあるから、如何でござらう、元老、除り巖流が傲慢で片腹痛い、彼れは強いか知れんが實に殘念、どうにか耻を搔せる工夫はござるまいか、將監笑つて、將心配いたす、巖流如き奴を打たせるのは造作ない、新参召抱への足輕、瀧本又三郎ナ、ヘエ、將、那れに申し付けて、巖流を小つ酷く打やして遣らう、エ、瀧本は未だ十代の若年者で宜しうと

さいますか 將ア、宜いとも彼れは二刀を宜く使ふからナヘエ
元老どうして御存じで 將拙者足輕部屋で大勢を對手にして居
るのを見て居たが、餘程宜く使ふヘエ 將早速上へ申し上げや
うと木下將盛から若狭守殿へ申し上げる、追々賢東齋巖流姫路御
城内にて宮本武藏を對手に寶山流の振杖を使ひまする講談に相
成りまする

第十七席

ソコで木下將盛が先立ちになつて若狭守殿へ巖流は三年の修行
を仕つり、日本無双の腕前になつたと傲慢を申え、實に片腹痛く心
得まする、君には御最負に候得とも天下の人は宏大なり、丁度幸ひ
あるは新参召抱への足輕瀧本又三郎は二刀を宜く使ひます、彼れ
と巖流と手合せをさせ彼れに打勝ちますれば速やかに揚り屋入
り御免仰せ付けられ度しと申し上げると勝俊侯 馬ハ、ア左様

であるか、然らば瀧本又三郎と巖流手合せを申し付けるであらう
と仰せられたので、木下將盛が揚り屋から瀧本又三郎を我が小屋
へ招いて、將さて瀧本長らく御窮屈でござつたらう、今般賢東齋
巖流立歸つたが、コレ、其傲慢如何にも片腹痛いに依つて其方
手合せをいたし、巖流を打負せむば其功を以て、將盛が執持つであ
らう、宮本天へも昇る心地をして、政誠に元老には種々御盡力に
預かり心魂に徹し、瀧本又三郎有難く心得まする、願はくは巖流先
生と立合ひ仰せ附けられたく、將湯浴みをいたえて相待つやう
喜こんで瀧本又三郎足輕部屋へ歸つて是から湯浴みをいたえて心
中には親の敵、兄の仇たる巖流と立合ひをいたえ、彼れを一本に打
込み生擒て置いてから、改めて木下侯へ願ひを上げ、尋常に仇討ち
を仕たいと意氣揚々と志居ります、足輕一同は、オイ瀧本剛いな
御家老の鑑識に叶ひ、巖流先生と立合ひの出來るやうな腕前だも

藏 武 本 宮

の九山先生は敵ふ氣支へないマア目出度ひ確かり瀧本や
て貰はふせ足輕一同もゾク／＼喜こんで居るソコで賈東齋巖流
を御前へ呼出えて木下將監が將さて巖流其方三ヶ年修行をい
たる道ばれ腕前上達に及びる由當家新參召抱への足輕瀧本又三
郎と至急手合せ申せ付けるに依つて左様心得る巖承知いたま
ました其瀧本又三郎と申するは何才にございます將然れば今
年十八才巖十八才……第一何流を使ひまするか將左様二刀
を宜く使ふぞ巖流心中に暇保としたのは年十八才で宜く二刀を
使ふといふのは吉岡太郎左衛門無二齋の實子吉岡平馬當時加藤
家の養子にありしと承はる年餘骨柄殊に二刀を使ふといへば宮
本より外にはない扱は彼奴實父の仇と我れを尾け狙ひ此姫路へ
下向をなし當家へ足輕に住込んだに相違ない夫ぞ尋常の奴に非
らず年は十八才とはいひながらは名人の段に足を踏掛けて居

藏 武 本 宮

ると心注いたので巖流は巖承知いたましましたが併も手前も
邪でございますから全快まで四五日日延べを願ひます將
夫は宜きい茲で賈東齋日延べを願つて置いて考へたのは中々尋
常の事では危ういに依つて現大和守寶山が工夫に及んだる寶山
流の振杖を人知れず巖流稽古をして此振杖で宮本武蔵の腰骨を
打碎いて呉れやうといふ卑怯な奴愈よ振杖が手馴れ熱意をして
来た所で病氣全快のお届けをいたします是に依つて双方へ御
沙汰に相成り姫路御城内庭先さへ幕を張り巖流は天地人三人の
弟子を連れ床机に掛つておへ居ります

第十八席

茲で武蔵は青山文平澤田左衛門押田佐吉の三人は苦もなく打
込んで終ひました賈東齋巖流幕の内から見て居たが愈よ宮本に
相違ない尋常の相手でないと思ふから彼の寶山流の振杖を扱ふ

宮 本 武 藏

へて幕を絞って立出でたるが互ひに名前を名乗り、巖流は後へ退
つて二三遍棒を振って居たが、チツと星眼に棒をウリウリと附
けた、宮本武藏は右剣を真向うに振構へ左剣を一文字に突出す、是
武藏が天地陰陽の掃へ、鞘の毛で突いた程の隙もない、互ひにエイ
ヤ、オーと氣合ひを掛けて詰りつ、緩めつ、戦かつて居た内に巖流心
中に引つ外されれば、夫まで詰れば此方のものと、ヤツといふ聲
諸ともに星眼の棒を上段より振込む、心得たりと宮本一足踏込ん
で、天地の剣でガツキと十字に詰止む、詰たが早い、か中に仕込んだ
る、鎧附きの分銅ガラ／＼と出る、失策た宮本が体を開かうと志
たのだが、左りの小鬘へ分銅が當る、強く當つたのではな、い、が、抜
ても堪らんのは八角の分銅、講談師の面体から千枚張りである、か
ら、抜つた位では傷も附きませんが、宮本の面体は皮が薄、い、左りの
小鬘を抜られ、ダマ／＼と破血に及び、思はず二足ばかり退る内、巖

宮 本 武 藏

流は手許へ棒を引く途、鎧も分銅も棒の中へ這入つて終ふ、夫が
早いから遠くに居る者には、分銅が出たか出さいか分りません、武
藏は參つたといふ聲が出た、家老木下將監様端に進み出で、ま
て、將、コレ瀧本如何いた、また武藏怒れる眼に血を注ぎ、政、御家
老へ申上り、上げます、が、手前參つたといふ聲を掛けません、の、巖
流先生、近頃、卑怯な獲物を、お使ひなさる、只今、お使ひに相成つたの
は、堤大和守、寶山が工夫に及んだる、寶山流の振杖でござい、ます、振
杖、おれば、是は、斯ういふ物である、ぞ、前に獲物を、斬はる、のが、明ら
か、お勝負、然るに、無断に、唯の、棒と見せ、掛けられ、勝負を、いた、ま、て、計
ら、ず、後れを取ります、ま、て、ござ、る、御指南、番に、似合は、ま、ら、ざる、御申
法、か、と、存じます、す、木下將監、憤然と怒つて、將、宜い、く、卑怯な、奴
だ、巖流の様子を見ると、最早、寶東齋は、棒を取り、鉢巻を取つて、木下
若狭守殿御前に、扣へて居る、から、木下將監が、將、コレ巖流、其方は、

只今瀧本又三郎と立合ひをいたるに、寶山流の振杖を以て勝負
いたるたさうだ、其方は三界一無敵流といふ流名なら何故木劍
を以て立合はん、卑怯なる獲物を持つて立合ふとは怪まからん、夫
も立合ふ前に振杖あらば何で断はらん、無断で立合ふは卑怯であ
らう、今一度立合ひ直せ、

第十九席

巖流カラ、と笑つて、巖左様でござる他流試合に一々敵に獲
物を断はる事はございません、是は何の獲物だと断はる暇はござ
らん、普通の棒か振杖か夫へ眼の止らんのは彼れが未だ道未
でございます、已れの藝を顧みず左様な事を申するは彼れが負け
腹を立つといふもの再度の立合は御免を蒙むる所、斯ういはれると
巖流の喋舌くる所も満更理のあいともない、木下は腹が立つて
堪らんが再び膝端へ出て参つて、將切瀧本只今巖流が新様、

宮 本 武 藏

宮 本 武 藏

申えられたが、何れ再度の立合はさせるに依つて残念ではあらうが、我
慢をいたせ、大地に両手を突いて居た瀧本又三郎、政賊に御家老
重々のお骨折り忝けを蒙り、御免と幕の内へ飛込んだと思ふと、瀧本
は幕の根方に置いた大小を取つて打込み、再びお庭先へ走り
込んだ勢ひは、四邊に風を捲き、天地に森ろく、大音揚げ、政如何に
賢東齋巖流、汝は卑怯にも、天正十八年八月十五夜萩の小路に、鉄砲
を持つて我が寶父吉岡太郎左衛門無二齋を討取つたであらう、下
拙は吉岡無二齋の伴同姓平馬、當時宮本武藏政名の寶父無二齋の
仇敵いで尋常に勝負せよと、大音聲に呼つたり、此時大勢宮本と
聞て、成程道理で強いと思つた、瀧本ら多くないよ、皆呆氣に取られ
て相へて居る、木下若狹守は大きに怒り、勝や日無敵あり足輕瀧
本又三郎、只今に相成り吉岡の伴宮本をどし、高言を吐く是ぞ敵國
の問者あるべし、召捕れと呼はる主命あれば止むを得ず、若武士衆

がソレ瀧本を召捕れ〜と騒ぎ立てるけれども眞正に召捕らう
 といふ者はない亦武藏も巖流にふそ恨みあれ木下家の若武士に
 は意趣も意恨もある譯でないから若年だが物に狂ふ人でないに
 依り罪のない者を斬るでもないと武藏は大劔を引抜いて健を返
 えて兩人左右へ打倒え其儘姫路御城内を逃げ出す後からドヤ〜
 追て来るばかり木下將監眞ツ先に立つて 將ソレ汝等瀧本又
 三郎を捉まへろ……追てはあらんぞ……網取いたすナ捉まへろ
 ……追てはあらんぞ元老へ伺ひますが 將何だ捉まへると仰え
 やるので 將左様でございませすれば追てはあらんと仰しやいま
 すが 將左様だ居ながらにして捉まへる御殿談仰えやつては往
 けません對手は足があつて逃けて行きます座つて居ては捉ま
 しません 將捉まらんければ夫で宜い……其内に武藏は堀を跳り
 越へて堀へ飛込んで終つたソレ瀧本が堀へ飛込んで下手へ上る

だらうと大騒騒ぐ中に木下將監が 將コレ〜 瀧本又三郎は堀
 へ這入つても上手へ上るよ〜此堀の流れを上手へ上ります
 か 將然れば下手へ上るのが順でございませう 將昔は下手
 へ上つたものだが今は亂世であるから上手へ上る〜エー成程
 ……皆を上手へ廻る内に下手へ上つて武藏は姫路の御城下を去
 る事三里半潮田村といふのへ逃げて参りまゝて郷士の潮田又左
 衛門の家に隠れて居りまゝたが夫は後で木下家に分りまゝた此
 時には何所へ逃げたか更に分らん非流の騒ぎをして居る所へ大
 坂表より大岡殿下の使者と来て攝津國兔原郡茨城の城主片桐東
 市正且元御上使といたまて播州姫路へ到着に及びまする玄關へ
 木下家の直役お出迎ひをいたし片桐を案内いたまて奥殿へ通す
 若狭守殿半途まで出迎ひをいたまて片桐正座に直り扱大岡殿下
 の口上を述べまゝたのは此度朝鮮か手入れに就て木下家へも夫

宮 本 武 藏

八十一
役が當りまゐた口上を述べて終へば片桐も御自分の身許苦狭
守勝俊山海の珍味を以つて御上使片桐侯を懇應まする時に片桐
侯が且若狭殿只今且元當家へ罷り越えたる時非常に雑踏を
いたえて居られたが何か事があつたのでござるか「どのお尋ねで
ございまする

第二十席

此時に家老の木下將監如何にも小癩に障つて堪らぬから將
御意にございます片桐侯へ申上げます新參召抱へ島組足輕
本又三郎を召捕うといふので只今雑踏をいたえたのでござる
且ハ、ア其瀧木又三郎と申する者何か悪業でもいたえたのでと
ござるか將イヤ片桐侯の前でござるが悪業をいたえたのではと
ざらん今日御庭前に於て當家指南番佐々木賢東齋巖流と立合を
いたさせまゐた所瀧本は卑怯の獲物に掛つて臆れを取りました

宮 本 武 藏

夫が爲め斯の騒動を惹起したのでござる且成程其瀧本と申す
るは何流を使ふのでござる將流名は何流なるか將監存じませ
んが二刀を宜く使ひます且ハ、ア年齢は將十八才且人物
は將色白にして織駒美男でございます且成程御當家御家老
巖流は獲物は何を持って立合まゐるか巖流の獲物を是へ御取寄
せ下さい片桐拜見をいたさう將承知いたさした將直ぐに
取寄せた寶山流の振杖片桐が取上げて右の腕で振て居たが中
ピン／＼響いて居るヤツと片桐が敷居へ打附けると中からガラ
／＼と鐘と分銅が出るヤツと引けばガラ／＼と這入つて終ふ若
武士初めて氣が注いで「オヤ／＼妙な獲物だナ片桐見て居たが
且賢東齋と申する者何れにござる將夫に扣く居りますのが巖
流で片桐は巖流を熱々に見て居たが且コレ賢東齋是へ出る其
方が只今使つたのは堤大和守寶山が工夫に及んだる寶山流の振

蔵 武 本 宮

杖であるナ 巖御意にございます 且其方は足輕瀧本又三郎に
是は振杖であるぞと断はつて立合つたか 巖断はりは仕つりま
せん一々敵に獲物を断はるやうな事では他流試合は出来ません
普通の棒の振杖か見切りの附かんのは彼れが甚道未熟でござい
ます 且何とや一々敵に獲物を断はる暇がない彼れが心得んの
は甚道未熟だと申すのか 巖御意にございます 且黙れつ巖流
夫は十町道場へ参て他流を持込んだ時の言葉だ先方の腕前が勝
つて居ると思えばこそ獲物を断はらず斯振杖を持つて敵の面
を打碎くかさては敵の腰骨を碎くか敵の一命を取らうといふ
めの振杖既に汝は三界一無敵流といふ流名にて過ぎぬ頃攝州大
坂の道場を開き汝は太閤殿下のお憎みを請けて大坂を追放に
あつた身ではないか然るに仕合せも若木下家の指南番と相
成り殊に瀧本といへるは足輕だ指南番が足輕を相手に勝負いた

蔵 武 本 宮

すのであるから謂は其方が致へる身ではないか致へる致はる身
で、身分の高い其方が足輕を相手にいたすのに振杖を断はらば無
断で勝負いたしたといふのは汝は何か瀧本又三郎と申する足輕
に遺恨でもあつて打殺さうといふ心得であつたか夫の左様を
単怯の立合をいたしたものであらう夫で指南番の役が勤まるか見
下げ果てたる奴だナ巖流も木下將監を欺く辨はあれど片桐を欺
く辨はありませぬ満座の中で片桐且元侯に立端を失なふ程に
老められ流石の巖流真赤に相成つて差俯向いて居る木下將監は
態を見ろ宜い氣味だ 若武士も巖流を憎んで居る人々は宜い
心持ちだと思つて居る幾ら御最負でも木下若狭守殿赤面をいた
えて勝コレ見苦まい巖流目通りあらん立てくさるもの巖流
鼠の舞が如くに御前を退つて行く跡で片桐が 且さて若狭殿手
前は未だ瀧本又三郎といふ人物は見た事はないが年齢骨柄とい

ひ肥後の國熊本の主人加藤清正が家來宮本武藏政名と申する者
に宜く似たり是ぞ清正自慢の家來にて既に過がえ頃天正十八年
八月十五夜長門の國萩の小路に於て吉岡無二齋を鉄砲にて撃つ
たる者は正ましく賢東齋巖流の外にあるべからずとは武邊社會に
於て専ら評判をいたして居る故ゆゑに宮本武藏政名實父の仇を
討たんとて肥後の熊本を發足させ偽名を名乗つて當地へ乗込ん
だに相違なえ……」

第廿一席

片桐且元は尙も言葉を繼ぎ且豫て義兄清正より我が家來宮本
武藏武術修行に立出でたれば若しも病煩ひの節片桐領分の内へ
届け出でなば厚く世話いたえて呉れよと我ら等を始め池田福島
淺野黒田其他の者へも夫々加藤家より頼みがあるに依つて頼み
を請けよ家々にては我が領地の代官郡奉行へ申し聞せあり是全

く宮本に相違なえ万一瀧本又三郎本姓宮本武藏ある事分り當
家に於て左様ある依怙最負をなしたる次第熊本の清正の耳に通
入りなば何條清正其儘安穩に置くべきか必ず太閤殿下へ言上
をいたえ清正より御當家へ談判を向けるかも知れん宜くお
覺悟をされ兎に角宮本の所在を探して最と町專に當家の落度を
武藏政名に詫おければ相成りますまい木下若狭守蒼くあり黄色
なり焦茶栗梅澤色と變じて驚ろきとらえて熊本の清正に談判を
向けられて堪るものぢやアあい今日日本に蛇の目の大奇位強
者はなほのに其蛇の目の親分に懸合れて伯父太閤に吩咐られ
ては八十三万石姫路城は取上げられて終ふ若誠は片桐殿の御
厚意千万添けなえ早速瀧本の所在を探すでござらう茲で片桐且
元は暇請ひをえて是は大坂へ立歸りませたさて片時も猶豫は
て居られんから巖流を召捕り瀧本の所在を探えて尋常の勝負を

蔵 武 本 宮

させなければ木下家の外聞になると十五人の輕輩に下知を傳へて木下將監眞先立ちて獲物を押取り、巖流の小屋を臨んで石捕りに向つて來ると、此方は御前体に勤めて居た巖流の弟子が、師匠を悪かれとは思はんに依つて片桐のいふ事を聞て驚ろき、御前を密と脱出で賢東齋の小屋へ來て、巖流に一伍一什の話をまたから巖流震へ上つて驚ろき、猶豫はえて居られんから持つて來たが、ア巖流を持つて天地人の弟子を連れ、逐々巖流は姫路城内を逃出えて終ひまた其の跡へ木下將監大勢を連れて向つて來たが、ア巖流の行衛が知れん是から八方へ手を別けて探す就中流本又三郎を早く探え出さなければならん、木下家の外形にも關はるに依つて段々手を碎いて尋ねると、漸々と知れたのは潮田村の郷士潮田又六の伴、又左衛門の許に足を止めて居るのが分り、またといふは潮田村の郷士潮田又六姫路の様子はどうであらうと、武蔵の身を

蔵 武 本 宮

氣遣えく思ふて、伴又左衛門に吩咐て姫路の様子を尋ねると、片桐且元の一言で、大守は無明の夢が覺め果て今瀧本又三郎事本名宮本の所在を探えて居るので、夫こそ白日晴天を得たりと、潮田又左衛門木下將監の小屋へ尋ねて來て、我れ等方に宮本が忍んで居ると届け出たから、漸やくに所在が分り、また、ソコデ木下將監八十三万石の御家老だか、亂世の武士は直ちのもでございませ、與物を釣らえて自身に、家老の身を以て潮田村へ宮本を迎ひに來て呉れ、また、武蔵は如何にも此將監に氣の毒で叶はん是より、姫路城内へ案内をいたされ、また、切て宮本武蔵は木下將監に連れられ、若狭守御前へ出た時に、若狭守勝俊侯兩手をか突きにちつて、勝さて宮本如何にも其方を見損じたるは斯いふ若狭の兩眼、疎いので、ある其方實父吉岡無二齋の敵、巖流を召捕らんと存じたるに、卑怯にも彼れ行衛知れずと相成たり、只今詮索中であるが、予の不行、屈

宮 本 武 藏

八十八
きは許えて呉れると仰るや八十三万石一城の主人が手を突いて詫れば夫までございます尤も宮本は律義の人だに依つて事が分れば決えて立腹はいたしません政敵とお手厚さの言葉をも頂戴いたる有難き仕合せ下拙實は瀧本又三郎と申すは偽はり宮本武藏に相違ござらん去りながら巖流逐電いたせばとて亦賢東齋を討てん事もござるまい夫に就けても武藏暴虎馘河の勇を好むに似たれども下拙御當家へ住込みたる刻飛龍丸御劍の儀に就き小坂部明神に欺むかれ我れ等身に濡衣を若て如何にも残念願はくば拙者へ姫路の天守見届け役仰せ付られなば有難き仕合せ

第廿二席

木下侯お聞あつて勝イヤ夫は千万忝けまい然らば望みに任せて勤めて貰ひ度ひ是から武藏は木下將監の小屋へ引取つて参り

宮 本 武 藏

八十九
まえた宮本と分つた以上は最と町草に世話をいたえます足輕もは是を聞いてどうだいな丸山先生尊公などが遠く及ばない譯だ宮本武藏だもの迎も敵はんでも仕方がない足輕頭の牧野惣八が惣どうも人物が宜いえ乃公も瀧本又三郎とは思はなかつたが風ぶる先生だナ併急い天守見届けの役を自分から望んだといふが大丈夫だらうけれども誤まりがなければ宜いがと心配をえて居りまを武藏は十分の支度に及んで日が暮れると是から姫路天守の頂上を見届けやうと大膽にも再び登つて参る前回に辨じて置いた通り天守の二重目まで登つて来ると武藏の顔の前を一文字に突つ切て行くものがある武藏体を屈めて見ると蟬蟻に相違ないハアさては前の通りだと右劍左劍の脛口を寛めて尙も三重目へ進んで来ると中途に陰火が燃へて居る膽力の落附いた宮本身体を屈めて下から見ると火の縁がない意と筋に相違

宮 本 武 藏

なしと恐れ氣もなく登つて来ると火は消へて終ふ、四重目へ掛つて来るとゴウゴウといふ音がきて、ガガラと石が降つて来る。政相變らず風を起さ石を降らせる、何の物かはと頂上へ進んで来ると雲に巻ゆる姫路名代の天守五重の頂上には正面に小坂部明神を祀り其前に来つて武藏は大剣を左りに引附け、小剣の鯉口を緩めいで来いと待つて居る、スルト次第に更行く夜嵐は狭間に當つて物凄く森々寂突たる中に忽然と老て武藏の前に現はれたるは十二一重に緋の袴、透々眉の厚化粧、十二骨の槍扇を携さへ善哉、妾は小坂部なり如何に宮本人懼れて登らざる然則の天守へ其方一人妖怪を見届けんとて登り来る志さ過分併も今宵は許す再び登らば其方の命はあいなぞとハツタと睨んだ顔色は陰鬱く、宮本武藏物をもいはす身体を屈め大剣の柄に手が掛ると、エイッと抜手も見せず斬附ければ、パツと妾は消て終ふ其夜

宮 本 武 藏

は夫で済んで翌日と暮り格を下り、木下將監にも話をいたさ、夜間十分に睡眠で夜になつて亦登る、相變らず小坂部明神が出る、斬附けるも妾は消て終ふ斯する事三度如何にも武藏殘念であるに依つて嗽手水に及んで一心に摩利支命天へ信仰をいたし妖怪の本體見届けさせれば給へと祈念を凝えて居ります所が宮本夜分眠らぬのに祈念を凝えて居る内に疲れが出てウツトリして居ると「起きよ武藏……起きよ武藏」と呼はるに、宮本両眼を開けば道は如何に、我が見る前に摩利支命天猪の鞍笠に騎がり出現をたま給へば、宮本大いに驚ろき、武アラ忝けなや有雨や大願成就いたえたるか、と喜ぶに如何に武藏姫路天守の怪物は汝の力にて討ち難え、當姫路城内より異に當つて三里法華ヶ嶽といふ山あり是に藥王樹といふ名木あれば夫を以つて速やかに變化を恐治いたせ、姫路天守の變化は三百歳を経たる黒狐といへる怪物なり、

いふ自分の聲に目が覚めれば、全身に汗を生じて居る。宮本は奇異の思ひをかえ、是から武蔵政名姫路の城内を立出で、法華ヶ嶽へ登ります。是は登り一里の山で、森々寂實とて固より人家はとさいません。頂上へ登ると少さな社があります。天へ禮拜をえて四邊を見廻して居るが、其外何にもありません。

第廿三席

スルト此社の堂守りをえて居たのが父又左衛門の友武光柳風軒といふ者であつて、樂王樹といふ名木を探して貰ひ伺親切に其心得などを教へて呉れました。武蔵は涙を流して厚く禮を送る。是より姫路へ引返して参る。本來なれば家老の木下將監に話をえて世の中に、出度ひといふ人なれば執持もするが、今は世を去つて法華ヶ嶽に、藥師如來のお守りをえて居る柳風軒ゆゑ世の中

宮本武蔵

へ出度よりもさかひから、其儘に捨置ます。さて武蔵は一歩入り、いたして今宵こそ退治て呉れんと、彼の樂王樹を引ッ提げ、大小の目釘を濡ませて、鯉口を緩め、其夜姫路の天守へ登ります。相變らき森々寂實として居る、スルト前の如く夜の八ッ頃、はひにゐると小坂部姫忽然と、武蔵の前に現はれ、如何に武蔵、已れはく如何なればこそ、妾を、輕んじ、當天守へ登り、我が面前を、踏さんとするか、愈よ、其方志さを改め、思ひ止まらん、に於ては、一命はないぞと、眼を怒らるハツタ、腕むに恐怖ともななき、樂王樹へ、双手を掛け、身体を屈んで、武光柳風軒に、いはれて居るから、小坂部姫の姿を見せ居るが、かに左りの膝頭を、疊へ突いて、腰を立て、爪先を突いて、右足の膝を上げ、是も爪先を突いて、いさといへば、直ぐに立てるやうに、体を拵へ、身体を斜に、宮本が後ろを、密と見ると、武蔵の身体から三間ばかり隔れて、眞ッ暗の中に、猫のやうな形をえて、眞ッ

蔵 武 本 宮

か輪になつて居る物が見へるから、扱てこそ武本先生のいふ通り
正面に形を置き本体を後ろに置く、今宵こそ變化逝きはせしと心
の内、に臨兵闘者皆陳列在前と九字をきりながら 政エイツとい
ふ矢聲と共に宮本が一足飛退き、後ろへ身体を開きながら、件ん
の薬王樹を双上段から飛退く途端に微塵になれど捲下ろす、何かは
以て堪るべきや、薬王樹を以て宮本に健たかに打たれるから、ガ
ッといふ聲物凄く、今や姫路の天守は崩れるかと思ふばかり、ガ
ガラ／＼と震動雷電いたま、狭間口を破つてドン／＼と風を起ま
て飛去つて行く物がある、

第廿四席

ホッ息を吐いて武蔵が四邊へ眼を配れば森々寂真として其跡
に物音なし心を落附け宮本が薬王樹を振つて居ると其後は何に
もございません、左右する内に東が白んで来た雲に懸へる五重の

蔵 武 本 宮

天守里は未だ暗うございます、武蔵が唾を搦て見ると廻りに銀の
針を溢したやうガラ／＼と光つて居る近寄つて左りの手に取上げ
て見ると、政、恐ろしい強張つて居る毛である、見て居る内に太陽
の影が登り十分に夜が明けて、知ら見ると壁の上にはホタ／＼と血が垂れ
て居る、打破つた狭間口へ血が引いて居るから、宮本が狭間口から
見渡せば、流石名代の姫路の天守野も山も真平に見へます、先づ宜
しと薬王樹を提げて、武蔵は格を下つて参る、扱て木下將監の小屋
へ来て、政、エ、元老へ申し上げる、昨夜怪物の本体を見届けまし
てござる、將夫は、どうも宮本氏御苦勞如何なすつた、政、コレ／＼
新様、／＼と儘かに打掃へたるから、垂て居る血沙を便りに参らば見
届ける事が出来る、といふので、武蔵が大將になり、長柄鎧組が十人
月が十張鉄砲は十挺、熊手鍵繩、繩階子等を持たせて、宮本は足輕五

蔵 武 本 宮

十人を借請け姫路城内を立出でると是より血沙のホクく、
て居るのを知るべに段々進み難所へ掛つて来ると金熊手健
繩階子を架て登り谷を超へ山を超へどうも宮本氏の前だが恐ろ
しい難所でござるナ、政左様貴所はお若い我々は意氣地がな
い亂國の武士とはいへん段々山奥深く進んで来ると先づ姫路城
中から四五里も来たかと思ふと森々寂奥たる森がある。○どう
だ、同役物凄いな森だね彼の森に近附いて来ると森の中で
が聞へる宮本此聲を聞附け、政占めたサア各々遁してはならん
弓組は空に向つて飛上る所を切つ放て、鎗組は此の森を取り巻
出る所を突け、鎗を下段に取り出して森をグルグルと取り巻
を番へて空へ飛上らうといふのを射殺す覺悟、鎗組も弓組も
戰場を往來して居る者で長柄を使ふ事が上手で鉄砲組は陣
取ると一度に森の中へズンドンドンと撃込み、鉄砲の煙は陣

蔵 武 本 宮

として立ち上る中に宮本が様子を見ると唸り聲が聞なくなつた
政「サア宜し乗込め」といふのでドツと関の聲を揚げて五十人の足
輕森の中へ踏込んで見ると森の真中に穴がある、其穴の中に鉄砲
に當つたと見へて仰向けさまに倒れて居るのを見ると昨夜宮本
が見た時には猫程の大きさであつたのが今見ると小半よりも身
体が大きからうといふ中々人間一人や二人では自由にならん程
の大物、真黒な狐が彈に當つて口を開いて死んで居る、足輕とも見
ると驚ろいた皆ブルブルと震へ出しどうだい、同役恐ろしい
大きな真黒な狐、何てエマア大きな奴だ、拙者は馬の兒だと思つ
たよ、大きな……」宮本首ッ玉へ手を掛け引ッ繰返して見ると昨
夜藥王樹で強かに背骨を打つたから骨が折れて居る、政各々是
を御覽なさい、拙者が昨夜此藥王樹で強かに双上段から打つたの
で藥王樹といふ名木の樹で此黒狐の土性骨を打折つて終つた夫

藏 武 本 宮

で彼奴悶いて居たのだ成程、どうも恐ろしいナ。政是を携いで姫路の城中へ運び、大守へ御覽に入れて跡で火を點けて焼て終はふ。兎に角斯様な森があると亦もや妖怪變化が住つてはならん。道具を取り出して忽ちの間に森へ火を點けたがドードツと一度に燃上り、森を形無しに焼捨て終ひます。さて姫路へ立戻ると就て長柄を五六本合せ黒狐の四足を縛つて是へ通し代る。いで、今度は平地を選んで出て参ります。遂々其の日の夕景に姫路城内へ参り、屈けて置いて翌日御庭前へ彼の黒狐を携ぎ出しました。木下若狭守殿お立出でに相成り、黒狐を御覽になると唯肝を潰すばかり。勝人禁制の五重の天守故ゆゑに斯奴が業をいたしたに相違ない。諸人に見せ付けよといふので、是から大手へ彼の狐を出して姫路城下は勿論近郷近在の者に見せ、ます見る者は唯驚る

藏 武 本 宮

くばかり續いて宮本の名前は天下に響るき、涉り人々恐れる天守へ登り、狐を退治たといふので評判が高くなる。然るに武光柳風軒は法華ヶ嶽から下つて来て、武藏が退治た黒狐を見て、實に美事なる物を退治たり、是程の者ではあると思つた。併し斯様な物を此處捨置いて念が残り祟りをするやうでは宜しくないといふので、是から武光柳風軒が御城内の足輕を借り、右の黒狐を法華ヶ嶽へ引取つて其廻りに焚木を積んで油を注ぎ火を點けてドンク焼て終ひ、其灰は法華ヶ嶽へ埋て終ひました。是を姫路の在法華ヶ嶽黒狐塚といふ宮本武藏が退治をいたしたのであります。

第廿五席

武藏は是より中國を差して乗込み、備前御野郡岡山へ來りました。此頃岡山は浮田中納言秀家公の御領地であります。丁度宮本の來た時には浮田公御不在でございます。います太閤殿下より朝鮮追討の刻

藏 武 本 宮

大將を命せられお在でがない、流石は岡山、御高二百八十万石、浮田公の御城下だに依つて中々盛んでございます、岡山の城下へ来て、彼方此方と見ながら来ると立派な積古場がある、政ハ、ア町道、場があるなと笠の内から看板を見ると白倉流指南所白倉源吾右衛門鉄心としてある、政ハ、ア白倉流とは珍しい流名……玄關へ掛つて、政お願申すもの申すド……政エ、手前は肥後の國阿蘇ヶ嶽神職の三男瀧本又三郎と申する者、御高名を慕つてお尋ね申してござる、一本御教導を願ひ度く推参いたしてござる、どうか先生へ宜しう、X暫らくお扣へますつて……先生、源何だ、X二十歳前後の男ですが先生に一本御教導に預り度いと申します、肥後の國阿蘇ヶ嶽神職の三男瀧本又三郎と云て参りました、源成程併し若年だが、政心だナ、一本御教導に預り度いと、剛い言葉だ、大抵はお手合せを願ひ度いと、試合をし度いと、かい

藏 武 本 宮

つて来る、マア此方へ通せ、弟子が玄關へ出て参りまして、X然らばお通り下さるやう、政御免……と草鞋を解き足袋を脱いで、足を拭いて昇りました、道場へ案内をされると立派な積古場程もな、く白倉源吾右衛門夫へ立出で、最も町噂に源吾右衛門挨拶をいたします、源エ、宮本氏には、どうか弟子、兩三名お稽古を願ひ度ひ、政恐れ入ります、お稽古をいたすといふ程の手前、源才はございませぬ、御教導を請けませうと、他まで身を卑下した一言、源、ア各々他流も、藝の樂りであるから、宮本氏と手合せを願ひませう、並んで居た十人ばかりの弟子が、年は若いし、色白で弱さうな宮本だから、甲何だ、斯んな奴、拙者が一番先さへ引ッ叩いてやらう、何の高の知れた若年者、懼れる事はない、立出でた一人、エ、拙者は白倉源吾右衛門の門弟、大川圓八郎と申する者、お手和らかに、宮本挨拶をして、淺黄の風呂敷の中から木劍を二本出し、政お相手に相

宮 本 武 藏

成りまする 團十ニ宮本氏には二本お使ひなさるか 改左様で
ございます 團成程……イヤ欲張った奴だナ一本の竹刀木刀で
さへ自由にならんのに二本使ふか並んで居た弟子が 乙「オイ
修行者の宮本といふ者は二本使ふせ、逆も二本の木刀が自由に使
へるものか 團「ナニサ那れは神官の俸だといふだらう 乙「左様
両故ゆゑにソレ右の手に御幣を持ッて左りの手に鈴を振った癖が
脱けないからソコで両方で思ふやうに使はふといふのだ 乙「ウ
ム成程 團「鈴振り剣術御幣振り剣術といふのだ、どうか團八旨
くやッて呉れれば宜い見て居ると、團八郎やッといッて構へる、武
藏は相變らず双足に立ッて双剣を左右に下げて居る 乙「オイ
何といふ構へだ、天邊から爪先さまで明透しといふのだ、團八は
星眼に附けて居たが 團「妙な剣術だナ鈴振り剣術か……ヤッ」と
打込んで来るのを宮本は請けもしないで一足後へ退たから、團八

宮 本 武 藏

の木劍はブーンと宮本の鼻ッ先きを擦ッて空を流れる失策だと
二の返しに打込んで来るのを十字でガツキと請止めて終ふ請け
たかと思ふと右劍で拂ッて左劍で大川團八の肩口をコツと打ッ
た 團「参ッた……團八驚ろいて 團「何といふ剣術だい 乙「どう
した大川 團「ヤッて見な妙な剣術だ、三又で請けやがッた、旨い事
を工夫して来たナ下レ 乃公が出やう……エー宮本氏、拙者は
白倉の門弟吉田小十郎と申する者やッと身構へると、武藏は相變
らず両方へ木刀を掲げて居る、ヤッと打込んで行く、一足退る、鼻の
先きを木刀で風を切る是が後ろへ飛退かれたのなら宜いが、身体
を透したばかりで鼻の先きを木劍で掠るから心持が悪い、已れ
ッ……と小十郎踏込んで真向から打下ろして来ると、十字でガツ
キと請けたと思ふと左劍で拂ッて右劍で肩口をコツと打たれる
小「是は驚ろいた妙な剣術……だ「サア出る者も出る者も皆對手に

藏 武 本 宮

なりません、白倉源吾右衛門見て居たが、源イヤ是は中々大した
お腕前、源吾右衛門お對手にならう、羽織を脱ぎ捨て、源吾右衛門支
度をして、夫へ立出でる

第廿六席

源吾右衛門 源お手和らかにと挨拶を志てやつと位取りをする
と、源吾右衛門が出て、矢張り同じやうに両方へ木刀を掲げて居
る。乙、オ、イ、同役、先生でも那の通りだ。丙、成程。丁、那れは私が若
へたが神官の子息で、時々二十五座の馬鹿踊りをするだらう、其の
鐘、魁、櫓、が馬鹿を相手に舞をまふ形だ、二十五座の舞、劍術が、甲、イ
ヤ、手数の意、る、劍術だ、ナ、鈴、振り、御、舞、振り、劍術、二十五座、劍術、か
大、變、だ、ナ、併、え、先生、から、唯、一、討、ち、であらうと見て居る。源、エイ、ッ
と打込んで来る源吾右衛門、武藏が十字でガツキと討けた、其、早、い
事、失、策、だ、と源吾右衛門、押、破、ら、う、と、押、え、て、見、る、と、ソ、ン、ナ、ッ、討、け、て

藏 武 本 宮

退る、引うとすれば手許へッル〜と附込んで来る弟子、遠見て居
たが、成程、先生も困つて居るナ……石流、白倉源吾右衛門、二三度、や
つたが、向ふが見へるから、木劍をガラリと投げ、跡へ退つて、源、參
ッたイヤ、中々、手前、あ、どの、及、ぶ、所、で、ない、恐れ、入、つ、た、御、業、前、木、劍、を
引いて、宮本が、政、是、は、先生、恐れ、入、り、ま、え、た、手、前、あ、ど、は、及、ぶ、所、で
ないが、手前が、請、け、て、居、る、内、に、先生、が、木、劍、を、お、引、き、に、あ、つ、た、の、で
源、イヤ、さ、う、い、た、ま、て、マ、ア、宮、本、先生、其、所、は、端、近、と、う、か、此、方、へ、是、か
ら、町、寧、に、瀧、本、又、三、郎、を、自、分、の、家、で、世、話、を、い、た、ま、て、源、旅、籠、を、取
つ、て、も、詰、る、ま、い、と、無、理、に、源、吾、右、衛、門、が、止、め、ま、す、る、源、實、は、今、ま
で、二、刀、と、戦、か、つ、た、が、斯、る、藝、才、の、あ、る、事、は、心、得、ん、で、居、つ、た、恐、れ、入
つ、た、と、い、ふ、の、で、源、吾、右、衛、門、町、寧、に、世、話、を、志、て、呉、れ、ま、す、宮、本、も
中、々、源、吾、右、衛、門、は、剛、い、先生、だ、と、自、分、が、正、直、だ、か、ら、人、も、正、直、だ、と、
思、ひ、厄、介、に、な、つ、て、居、り、ま、す、白、倉、源、吾、右、衛、門、が、二、刀、を、教、へ、て、呉、れ

宮 本 武 藏

といふから武藏は二刀を教へて居る、迂濶といひ三月ばかり廻厄
にゐつて居たが、さて或時の事、弟子の居りません所、で源吾右衛門
が、一口飲みながら、源時に宮本先生、どうも拙者過日から先生の
様子をお見請け申すのに、瀧本又三郎といふのは、偽りでもござら
う、其實宮本先生でござらう、如何で今日日本廣くと雖も二刀を使
ふ者は先生の外にない、宮本武藏先生でござらうといはれると武
藏が、此人は正直だ剛い人だと思ふから、我が本姓を明しても差支
へあるまいと考へたから、政如何にも拙者宮本でござる、武術修
行中は瀧本又三郎で歩きます、源、イヤ夫は、政、併し餘人には
は、どうか我れ等の實名を明し御無用、源、決して拙者餘人には
左様な事は申さん、其のくは濟んだが、源、場吾衛門腕を組で考へた
のは、是が宮本といふと些と面倒だ、何故かといふに、其白倉源吾右
衛門の先生は賢東齋殿流で、師匠の殿流に勘當をされ白倉流とい

宮 本 武 藏

ふ流名に改めた、亦其の身の實弟、澤田空左衛門は殿流の弟子だ、
ア見ると夫宮本は親の敵と賢東齋を尋ねて居る、明日にも師匠殿
流に出逢へば、宮本が勝負する時に、弟澤田空左衛門は劍に附いて
居るから、助太刀をする、到抵弟の澤田空左衛門まで、及ぶ所であ
い、然らば武藏に討たれて終ふ弟の身の上も、大切勘當されても我
が爲めには、一旦師匠と仰いだ殿流、此人の身の上も大切、是は不義
のやうだが、師匠の爲め弟の爲め、宮本を活ては置けないと覺悟を
して、源吾右衛門、宮本の大難、白倉源吾右衛門命の瀬戸際、茲で源吾
右衛門が新たに槍で風呂を拵へました、尤も岡山の風呂は戸廻
風呂といふので、有名なものでございます、戸廻の内に風呂がある
是が愈よ出来をいたした時に、源、さて宮本氏、是ぞといふ別段に
御馳走もございませぬ、岡山名物、戸廻風呂を手前新たに出来まし
た、風呂開きの節、先生に這入つて戴き、御尊体をお清めどうか御出立

宮 本 武 藏

を願ひ度ひ 政夫は誠とに忝けまい然らば即刻頂戴いたすでござらうソコで風呂加減を源吾右衛門弟子に申し付け見させて置いて宮本を風呂場へ案内をいたしました大層立派に出来て居ります

第廿七席

宮本政名は大小を刀懸けへ掛け、積鼻揮をはいて彼の戸棚風呂へ這入りました、スルト戸を閉めて終つて戸外から開拔を掛たからモウ出られませぬ斯して置いて如何でござるナ宮本氏、風呂加減は 政丁度宜しうござる、お微温れば差します熱ければ埋めます政、イヤ丁度宜しいッて居る所へ沸線返つた湯をドンク注込んで来るから、其熱くある事 政、是は恐れ入つたが大分熱くあつたやうだからお埋め下さいお埋め下さるやう委細心得ました埋めるのに水を埋めまいで、沸湯を埋めるから、堪るものぢやアない

宮 本 武 藏

湯は段々沸立つばかり、宮本を湯表殺して終はふといふ心算、武蔵を焔だと思つて居る、さしもの豪傑、宮本も身体沸上つて来た、是を宮本の岡山熱湯風呂の難といふ、源吾右衛門が計つて殺さうといふのでございます、武蔵政名驚ろいて戸を開けやうとしてやつて見たが、開拔が掛けてあるから開きません、ソコで武蔵が十三才の時、から足掛け二年長門の國萩の在昌安寺村の泰山住持より教はつた真言秘密の法といふのを行つて居ります、此真言秘密の法といつても湯を水に返す程の力はあいが、一時を凌いで居ります、此方は源吾右衛門弟子を集め、源どうだモウ宜からう、大概湯表上つたらう、モウ先生十分湯煮上りましたぞ、併し未だど往かせせん、ナニ宜からうと一人が開拔を抜いて戸棚の戸を開けると、バツと湯氣が出る、沸湯が吹溢れて来る、中の様子はどうであらうと覗くと、宮本は板目へ寄掛り、ウツトも居ると表からヒヤッど吹

藏 武 本 宮

込んで来る風眼を開くと戸が開いて居る。政已れ申せたり白倉源吾右衛門と突然戸棚風呂の中から躍り出たから大勢はアツと驚き素破や宮本が化たぞと逃げ迷ふのを宮本は、四拔へ手が掛ると逃げ行く白倉源吾右衛門の後ろより一足踏出しさまに彼の戸棚風呂の關拔で、エイッとして腦天を強かに抜つたるから、盛吾右衛門ギヤツといふと其所へ倒れる。先生が討たれたと右左りから取包むのを、關拔を振廻して當るを幸ひ引ッ拂ひ三四名を其所へ打殺してホッ息を吐いたが、飢らの水船の水をガブくと呑んで見ると向ふの刀掛けに己れの刀が掛つて居るから、天の與へ添けをえと大小、掻込んで片時も猶豫はあらんと、備前御野郎山の城下を後に夜に紛れて、木武藏何地を的かいふ事もなく逸散に逃げ出た。一ツの山へ登りまゑてホッ息を吐いて居る、何たる夜嵐が身体へ當りビッ、猫みまする山の頂きへ來ると九尺

藏 武 本 宮

四方のお堂がおりますから、此内へ這入つて一息吐かうと、椽端へ昇つて見ると、白鳥明神とえてありをぞる。政、今宵は堂中に一夜の宿りを拜借いたすと如何にも身体へ風が當り痛むゆゑ、白鳥明神と認れたためたる、緞帳を取つて我が身体へ纏ひ、夜が明けてから方針を立てやうと、其夜を明えて居る所へ賊が兩名で一人の娘を勾引て來た。此賊を追拂つて女を助けたのが縁で、此女の親岡山城下の倭屋喜兵衛方へ引取られ、傷の療治を致して貰ひました。此邊は大略を致さす、切夫から武藏は大坂へ出で、御主君清正公へか目通りをいたし、尙亦清正公より、太閤秀吉公へ仇討ち免狀の御下附を願ひ出でました。ソコ太閤殿下總登城を仰せ付けられました。天時に太閤殿下諸侯方にお向ひをされ、秀さて一同へ申え付る。天正十八年八月十五夜に、佐々木賢、齋殿流といへる曲者、宮本武藏實父吉岡無二齋を、鉄砲にて討つたる由、右殿流を召抱へる者は、衆

宮 本 武 藏

名改易申付けるに依つて左様心得る、亦殿流の所在見附け次第
其方どのの領地へ参りなば、速やかに討手を向け殿流を召捕つて
清正の手へ相渡すやうに、屹度申付けたまはし、諸侯方一同に承知
仕つりまゑてございませうと、お請けをいたたまさる。是では宮本武
藏日本無双の仇討ちが出来ます、恐れ多くも太閤殿下よりのお聲
掛りでございませう、免狀などより一番確かなもの、對手の殿流野郎
日本廣まると雖も、是では居所がない、太閤殿下のお下知に依つて、殿
流の名を聞けば到る所の奉行代官の手で召捕るといふから、賢東
齋も身の置き所がございませうまい。

第廿八席

夫より武藏は大坂を出立して京都今出川の吉岡憲法の許へ来る
と吉岡は作州津山へ天狗退治に行つたと聞いて武藏も津山へ乗
込んで参る吉岡憲法は是より先き作州津山に天狗が出るといふ

宮 本 武 藏

のを聞いて津山の城下へ乗込んで参り吉野屋といふ所へ泊り其
夜時刻を計つて吉岡憲法先生 憲然らば主人行つて来るよ、主
へエ入つてらつしやい支度をいたして憲法吉野屋を立出でます
る城下は森々寂寥として人子一人通る者はございませぬ、真とや
天狗が下界をするといふは偽り浮田中納言秀家公の近臣三輪重
左衛門伴野兵遣、柏木半助といふ三人の者、亂世でありまするに依
つて活胴を試し、搦物切りをしやうといふので、詰らん道樂があれ
ばあるもので幾ら亂世とはいひながら無益に人命を絶うといふ
のは、實に武士の行ひにある間敷き事でございます、餘り此評判が
高く参りませたので、日が暮れると誰も往來がない、相變らず右の
三人は城内を忍び出て、兵どうだい此節はマア往來がなくさつ
たナ、重左様さ人間が宛然不漁にあつたと思ふ位、一人二人打
切さ度ひナ、腕が唸つて仕様かないせ、何か通るだらう、斯うなつた

宮 本 武 藏

口にやア何でも構はない、息のある物は猫が鼠でも苦まくな、切
り度ひナ〜といッて居る所へ南無阿彌陀佛〜念佛を唱へて
一人の坊主が悠々と通行をする間とはいひながら、度院んだ柏
木半助、半來たぞ〜坊主が通る、イヤ坊主だらうが非人だらう
が斯うなれば用捨はさかい覺悟いたせ〜後ろより、ツカ〜と近寄
りさまに腰を捻つて、エイッ〜と一發氣合、誰にも切附けた一刀、眞
二ッと思ひさや、太刀風にヒラリと体を轉す、南無三〜一刀を取直
さんどあす間にボキーンと何で打たれたか、柏木半助、イヤといふ
程肩口を毆られ、ア〜と驚ろき跡へ返る、正面から透さず切込ん
で来る三輪重左衛門、危ないワ〜と体を開いたは目にも止らず、重左
衛門空を討ッて出る途端、体を開きながら、左足を揚げて、弱腰を
蹴られたから、重左衛門ヨロ〜と二間ばかり、タ、ラを踏んで退
る、

宮 本 武 藏

第廿九 唐
伴野兵造が兵己れッ〜と切込んで来るのを引ッ外志、エイッ
と打つたる片手打ちの八寸三分の小太刀、眞眉間を打たれてア
ッと驚ろき、伴野兵造刀を擔いでドン〜逃げて行くから吉岡憲
法憲、ヤイ此木ッ葉天狗も、汝等のやうなヒロロ〜天狗は相
手にあらぬ、明日の晩は大天狗を出せ、斯んを烏天狗ばかりでは役
には立たん、今宵は助けてやるから、明日は大天狗を出せ、大盛を揚
げてカラ〜と打笑ひ、其の儘行衛知れまどありとする、三人は命
辛々刀を擧げて一丁ばかり逃げて來たが、重、どうだいマア恐ろ
ろい強い奴があるものだナ、那れは普通の坊主ぢやアないせ、槍木
どう考へても、那れは天狗に相違あるまい、天狗〜と反駁を喰
ッて三人は放々の体で城内へ逃げ込んで、終ひまゑた此方は憲法
夜の明方に吉野屋を差ゑて立歸つて參り、門の戸をドン〜と叩

百十六
 さ 憲 御免をさし、今歸りまえたよ、エエ 晝間泊った坊主だが今歸
 ったよ、番エ、旦那那の早く泊った坊主のお客が歸つて来ま
 たよ、戸を叩いて居ますぜ 主さうか、ナニ殺れたに遠いあるまい
 番私をもさう思ふ何だか聲が陰々どえて居ますぜ、黙つて聞いて
 御覽をさし、何だか叩くのにも力がございませぬ 主さうか……
 ドン 番ソラね 憲宵に泊つた出家だが、開けて下さいナ
 番ホーラね旦那、幽的にあると力が脱る叩くのにも音が陰氣で何
 だか哀れを聲ぢやアございませぬか、旦那、歸つて来る筈はない
 が天狗に裂れたんで、乾度三十三兩の金に念が殘つてソコ歸ッ
 て来たのかも知れませぬ 主さうか、番那れを旦那お前さ
 んが使ふと生さ替り死に替り吉野屋の家へ崇りますぜ 主縁起
 の悪い事を番頭いふナ 番夫だからね旦那、お前さんが使ふと往
 けまいから、葬式料を拂つて残つたのは私くまに下さいます 主

百十七
 怨張▼た事をいふ奴だ、ナ貴様は「ドン」 憲早く開けて下
 さいナ 番へエ、今開けます…… 兎に角旦那、開けまい譯には
 往きません、開けて遣らないと念が殘りますから掛金を取りガラ
 ー 締を掛けて 番へエお歸り 憲イヤ餘り早いのでゑ氣の
 毒だつた、私も疲勞たから歸つて来まえた 主お歸んをさし、ま
 る如何でございさすか、足はありますか 憲イヤ主人、足は満足
 だよ、此通りダ 主幽霊には足はないといふがチャンとあります
 ナ 憲あるとも、主さうです、天狗は出まえたかい 憲出た
 目 主、出まえたニ 憲出たが主人、イヤヒヨ、の木ッ葉天狗
 ばかりで役に立たんでナ 主へエ 憲私がグッ、とお經を
 讀たら皆木ッ葉天狗が逃げて終つたが、那れぢやア錢儲けに
 らんマア今晩行つて大天狗を生擒て来やうと思ふ兎に角一錠入
 りるやう是から座敷へ道入つて憲法先生一錠入りグツスリ寝て

終ひままた十分夜が明け切つてから吉野屋では何といふ平間を
天狗だらう坊主をスバリと殺て終へば宜いのにといつて居る扱
て日の内は寝んで其の晩になると憲法支度をしたまて出て参り
段々お城下の方を探えて参りまするが更に出逢ひません 憲宜
左手へ提げて来た小風呂敷の内から取出たのは京都から用意
えて来た紙帳でございます津山のお城下外れ天輪寺の松並木に
紙帳を出して松の木から松の枝へと釣つていさ来いと紙帳の内
へ這入り四方へ人の氣が注かぬやうに透が出来て居りまゝて
其所から四方を見廻して居りまゝる晝間でさへ往來の餘りござ
いません松原夜に至つては尙更森々寂寥といたまて居ります折
えも響く鐘の音は耳を貫ぬくばかりにカーンと聞へる追々
に鐘が近附いて来る津山城下外れの松並木に三勇士の出逢ひ次

席に翻じまする
第三十席

紙帳の内には吉岡憲法今頃はひ鐘の音をさせ是へ来るのは六十六
部か但まは天狗が姿を變へて来たのかと透の所から聴くと大乗
妙典の笈を背負錫杖を突立て鐘を鳴えて來掛る身の丈け拔群に
高き六部 憲一、大層殿の六部だ、覗いて居ると近附いて來
た彼の六部紙帳の前に立直り 六、ヤ、人里隔れた松原に紙帳を
釣つて圖太まくも寝て居るは此津山に隠れもなき天狗の住居と
覺へたりいさ大天狗でも小天狗でも是へ出て遠國より生擒
にきて呉れんと當地へ推参いたま六十六部目でされば入込ん
でも生擒がどうや憲法が是を聞いて 憲ハ、ア同氣相求める
天狗を退治に來たとは感心な六部ダ……イヤ夫へ参つた御仁、私
は天狗では無い、實は天狗を退治に來たのだが、ヨロ／＼の木ッ葉

天狗ばかりで大天狗に出逢はんだノソク歩いて居るは大儀
だに依りて紙帳を釣つて此中に夜露を避けて居るが左右する内
に天狗の方で探えて来るだらうと思ふ聲を出えて河原を釣る傳
授を行つて居るのダ 六成程 憲 扱て 一見識ある茶屋と
見請けたが何人で 六 斯申す下拙は豊後の國臼杵の城主大友豊
後守家來竹の内加賀の介と申する者は是を聞いて憲法は 憲何と
扱ては豊後臼杵の大友家の臣竹の内先生なりまか斯いふ某とは
京都今出川に道場を開いて居る吉岡憲法でござる 加何と扱て
は吉岡大先生 憲イヤ知らぬ事とは申さながら御無禮を仕つツ
た紙帳を捲り 憲兎に角竹の内先生此方へお這入り下さるやう
加然らば仰せに從がひ御免を蒙むつて夫へ這入るでござらう
勇士紙帳の内に入つて 加同じ志さまで當地へ出向いて参り
えが必らず天狗の業ではござるまい、浮田の家來に僅かの腕立て

を好む若武士のさす業と覺へたり懲戒の爲め目に物見せて迎は
すでござらう 憲左様昨晚はコレ 斯様三四や四匹ではござ
るまい、多少と必ら居るに相違ない今晩は一纏りにえて大勢を
生擧げて目に物見せて遣はまさせう両家紙帳の内で見ると話を
えて居ります、此方は例の三人晩夜にも懲す又々出向いて参り
重とうだい柏木晩夜のやうな強い坊主は往かんせモウ些と手頃
の奴が出て来ると宜いが 半左様 重今夜はマア天輪寺の
松原へ出向いて見やう 半夫が宜からうと三人は松原の方へと
出向いて参り時刻を計つて居ります内に耳朶に響く諸の音律
重オイ兵遣此人里隔れた松原に諸をうたつて来る奴がある正
く武士、武士おれば天の與へだ、切りであるぞ 兵さうとも
三人は松の小蔭から伺へば体格の小兵を武士管一文字の笠を背
中に背負て、兩の腕を明けて来るのは流石は心得があると見へま

す、急ぎもやらず、悠然と羽衣の露をうたつて来る。松蔭から見ても、
アヤツたりと三輪重左衛門やり過ちて後ろからエイツと一喝、
んで打込む。剣の稲妻、真二ツと思ひきや、ヒラリ体を轉えて空を打
たせ、アツと右に持つたる鉄扇で健かに利腕を打と、踏眼やつを左
足を揚げて蹴返せば三間ばかり重左衛門は蹴倒される。透さず右
と左りから叫んで切込む。伴野兵造、柏本半助危ないワと飛退る。空
を切つて取直さんとするやつを踏込んで肩口を打掃へる。途端に
切込んで来る伴野兵造、ヒラリ轉えて腕の附根の所を強かに打つ
ア、アツといつて真劍を取落さ、道は叶はじと雲霞と逃げて行く。待
て、天狗待てと追駈けながらに逃げんとする三輪重左衛門の利腕
首筋をムンズと押へ、重左衛門をブラ下げながら天狗待て、
追駈けて参ります。二人はドン、逃げるが、半、恐ろしいと
うも強い奴があるものダ、オイ、伴野、どうだい、強い奴ぢやア、いか

オイ、兵造待ちなよ、兵造振返つて、兵氣の利かない野郎だ、名前を
呼ぶ奴があるか、

第卅一席

伴野、柏本の兩人は一生懸命逃げながら松原を出外れやうとする
と紙帳が釣つてあります。後ろからは天狗待て、天狗待てと追駈
けて来るから、伴野の紙帳の中へ二人はドンと飛込む。加、動
ナ、右左りからムンズと押へられる。半、どうか命ばかりは助
けなすつて、加、貴様達は何だ、半、ヘエ、往來の者で、只今後ろから
天狗が追駈けて参ります。加、天狗が追駈けて来るさうか、宜
く、我がが置まつてやらう。半、有難う存じます、恐ろしい強い天
狗でございます。加、さうだらう、天狗は強からう、ナ、待つ間程なく
三輪重左衛門を引摺りながらア、ア、健かに此紙帳の内へ、只今
木ッ葉、天狗が二羽這入つたと見請けるが、サア是へ出せ、出さんと

あらば紙帳を打破すても生擒ぞ只今此紙帳の中へ天狗が遁入つたに相違ない。憲何だと恐るる志い津山といふ所は天狗流行だ。追駈て来る奴が天狗呼はりをする志逃げて来る奴は跡から天狗が来るといふ……コレヤイ貴様達は天狗か。兵どういたたまえて今我鳴て居るのが天狗で加コレ往來の天狗宜く聞け二人の者は我々が置まつた以上は渡さん弱鳥懐ろに入る時は獵師も是を討たずの慣い渡す事は出来んぞ何だと渡す事は出来んとは奇怪あり強て渡さんとあらば紙帳を打破つても生擒がどうぢや。憲イヤ小賢さ其の一言天狗汝は何といふのだ。オ、身不肯ながら肥後の國熊本城主加藤主計頭清正の家來宮本武藏政名といふは拙者だ。是へ出せ。憲何だと扱ては清正公の御家來宮本武藏政名殿だ……ヤ此木ッ葉天狗奴汝等兩人偽はりばかり構へ居るナ追ふて来たのは天狗でない加藤家の臣宮本先生だ……コレハ

宮本氏知らぬ事とはいひながら每名雷の如くに承知いたまて居るお目通りいたすは今初めて斯申す下拙は京都今出川の吉岡憲法でござる。加まつた下拙は豊後日杵大友の臣竹の内加賀の助でござる。憲只今木ッ葉天狗は捉まへて差上げる……野郎動くナ伴野兵造柏木半助オヤッ。驚ろいたぞ。どうれで敵はい。譯だ選りに選つて大變を奴ばかり集まつた。憲何だ大變を奴とは紙帳を捲つて立出でたる憲法加賀の助の兩人。憲扱て宮本先生我が尊師吉岡太郎左衛門無二齋先生の御次男お名前は豫々承知いたすがお目通りは初めて併え暗さは暗え物の黒白も判然分らず政コレハ。憲法先生實は下拙京都今出川へお尋ね申せまが當り地へお乗込みと承はりお跡を慕まて参りま武藏計ら。是にて見参いたすは何より頂上。憲時に宮本先生何かブラ提げてお在であるるナ。政左様木ッ葉天狗を一羽生擒つて提て居る。憲夫は

〱 恐れ入った……ヤ、此ヒヨロ〱 天狗貴様達は何か 兵、誠
 にどうも恐れ入りませぬ、實は手前どもは浮田の家來伴野兵造
 半、柏木半助と申する者で、憲、ウム何だ、那の捉まつたのは、半、那
 れは三輪重左衛門と申す同役でございませぬ、憲、成程宜ま〱 貴
 様達は取るにも足らん腕前でありながら、是まで無益に多くの人
 命を絶つといふのは了簡達いの奴等だ、何は亂國でも無益に腕立
 てをする位、おなら何故戰場へ出て相對づくで勝負を志すのか、だ
 町人百姓の命を取つて何とする、半、へ、何とも恐れ入りませぬ
 憲、此事が他國へ洩れなば、詰り御領主の不行届きとなり、汝が作り
 し罪は皆浮田侯のお名前に障る以來、斯様な真似をする、志しを
 改めんとあらば、今汝等を三人で踏潰して終ふがどうだ、兵、誠と
 に恐れ入りませぬ、憲、ウ、いたませませぬ、モウ志ざしを改めませぬか

ら御勘辨を願ひます、憲、勘辨をて呉れといへば免して遣はす、併
 ち斯う事が極れば夜の明けらるまで、斯様な所にも居られん、汝等も
 命を助けられた代り、我々三人を汝等屋敷へ連れて行つて、今晚は
 世話をし、兵、承知いたしました、憲、夫ぢやア三輪重左衛門は
 武藏の若先生に捉まつたのだから、貴様は宮本先生のお宿をし、
 重、承知仕つりました、憲、兵造、貴様は乃公が捉まへたから、手前は
 私を連れて行け、兵、畏こまりました、伴野兵造は憲法に捉まひ、柏
 木半助は竹の内に捉まつたから、半助は加賀の助のお宿をする事
 にあつた、ソコ憲法は紙帳を取つて終ひ、風呂敷に包んで、三人は
 城内へ伴なはれます、然らば明日といふので、名々の小屋に別れ
 ます、三輪重左衛門は食祿千石を貰つて居りました、柏木半助
 伴野兵造は何れも八百石宛取つて居ります、憲、兵造、兵、へエ
 憲、貴様は此浮田家でとれ程取つて居る、兵、八百石頂戴いたして

居ります 憲ウム八百石といふ大祿を取りながら、試斬りをする
なんて怪しからん奴だ、酒があるだらう、八百石の大身だから、酒を
燗けて出せ 兵「委細心得ました、只今用意を仕つりました 憲夫
で宜い、八百石丈の馳走をしる、貴様家内があるか 兵「女房はこ
さいません 憲「女房がある、と試斬りなんぞしやしない、御身だか
ら其んを事をするのだ、奉公人を使つて居るか 兵「下女はモウ寝
て居ります 憲「さうだらう、併し夜更けて居るから、下女下男を起
す、命代りに貴様が勤らけ 乃公は暗くつては酒が飲めんか
ら、蠅燗の太いのを二本ばかり八百石だからあるだらう 兵「ござ
います 憲「さうだらう、夫を二本も點火して看は何でも宜いから、貴
様も一ぱい飲んで乃公の對手をして、決して遠慮をするな、兵遣
驚ろいて 兵「手前が御馳走をして誰が遠慮をする奴があるもの
ぢやアない…… 是から吉岡憲法散々贅澤をいって酒を飲んで、遠

々東が白むまで飲んで終ひ、明け方に憲法がトロトと睡ります
る、伴野兵遣寝る事も何も出来ないから、三輪重左衛門の小屋へ來
ると 兵「お早う 重「是はお早う 兵「昨夜は酷い目に逢つた、宮
本氏はどうなすつた 重「宮本氏は歸つてお在でなさると直ぐに
お寝みあすつた 兵「ウム流石はどうも宮本先生だ、拙者は弱つた
よ些ッとも寝やしな 重「どうして 兵「憲法が酒を飲んで、プウ
くをいって、真夜中に使役はれて驚ろいた 重「さうだらう、憲法
先生ぢやア堪らぬ、併しマア拙者は宮本氏だから仕合せをした
所へ柏木半助がやつて來て 半「お早う 兵「どうしたの、半助竹の
内先生は 半「是も別段贅澤も仰しやらないで、直ぐにお寝みあす
つた 兵「ウム各々は仕合せだつた、拙者一人袋ろ圖を背負て終つ
た…… 是から夫々小屋へ立歸り朝飯を濟ませて、竹の内加賀の助
吉岡憲法の二人は三輪重左衛門の小屋へ出て参りまして、改めて

宮 本 武 藏

宮本武藏に面會をいたしました。流石は憲法も身持ち放蕩の中にも一流の先生丈けあつて、宮本武藏は若年だが、我れ一流の指南をするまでに取立てられた。吉岡太郎左衛門無二齋の御子息であるから、師匠吉岡無二齋への奉公と思ひ、決して武藏に粗末な扱ひはいたしません。何所までも師の亡き遺子と、宮本先生を尊敬して居るのは實に憲法も是等は感心なものでございませぬ。時に柏木三輪、伴野の三人が御殿へ出ますと、浮田中納言秀家公は前申し上げたる通り朝鮮征伐に就て御不在でありまして、御家老の長船紀伊守殿お留守居であります。

第 卅 三 席

家老長船紀伊守殿御前へ出で三勇士お目通り相濟んで後憲法は京都加賀の助は豊後の國へ立歸ります。さて宮本武藏政名は美作の國を立ッて飛騨路から信濃へ抜けて行かうといふ彼の乗鞍

宮 本 武 藏

ヶ岳を差して夜を日に續いで参ります。時は十月下旬、グク登りの峠へ掛ッて来る平地から凡そ三里も来たかと思ひますが、人家は更にございませぬ。峠の上へ来ると汚ない家が軒あります。覗いて見ると圍爐裡の前に黑白交の障子が長く生へて、頭も達々として居る一人の獵師、胡床を置いて障子を撫て居る家の様子を見る。と竹の柱に進が壁の代りに風除けになつて居ります。政少、何なるが子。○何だ。政拙者は武術修行の者であるが、飛騨から信濃を抜けんとして途中で近路を教はつて参つたが、行暮れて疑い、夫はマア御修行者御難儀だらう。是は飛騨から信濃へ抜ける近路であります。人家は更にございませぬ。所朝早く此峠を越さんど中途に宿屋はなし、上りが三里あつて下りが三里、随分難所でございませぬから、政成程主人は、何といふ峠だ。○左様で

宮 本 武 藏

ございます、是は蛇峠といふ峠でございます 政「蛇峠……ウム、何
しる今晩は御厄介にあらう草鞋を脱ぎ笠を置き、武蔵政名反古張
りの障子を開けて奥の一間へ這入ると……奥といつた所が矢ッ
張り汚さい所、正面の太い竹の柱に凭掛り横にはなれませんが
敷てある筵の上へ安座をいたし、大剣の柄を下へやつて箱尻を掛
ぎ柱に凭掛りウトウトと眠るともかく長旅の疲れにや眠ると上の
簀の子の間から五尺ばかりの青蛇、スル／＼と出て来たが武蔵の
凭掛る竹の柱に頼み附いて下つて来る、宮本武蔵は蛇が大嫌ひの
人だから、ア、氣味が悪い早く避けやうと思ふ内に彼の蛇は武蔵
の首へグル／＼と捲附く道は堪らんと思ふ内に彼の蛇は武蔵
とするが、いッかな取れん力一ぱいに蛇を捉まへてグイ／＼と引く、痛
いので目が覺めて見ると蛇は夢で自分の手で我が咽喉を確乎押
へて居る、全身に冷汗をわいて 政「ア、是は飛だ事をいたした、私

宮 本 武 藏

は蛇が嫌いだから夢を見たのだとホット息を吐いて居ると、ヒッ
／＼聞ゆる話聲 政「ハナ今まで一人で居た此家、ヒッ／＼話し
聲の聞へるのは、狐師の仲間が歸つて来たのかとソツと宮本は障
子の破れから覗くと武蔵の居る座敷は眞ッ暗ですから、向ふから
は分りませんが、三人が居座敷の廻りを取巻いて暖めて居ながら、
十二箇かに今夜泊つた奴は宮本に違ひないよ、向ふでは拙者の顔
を忘れて終つて居るが拙者の方では覺へて居る、正に宮本の小僧
に相違ない、飽までも師匠巖流を討たうと尾狙つて居るモウ少し
経たら彼れを亡き物にして終はふ……と話をして居るのを宮本
武蔵熟々と様子を窺ふと、棒の生へて居る奴は巖流の弟子澤田奎
左衛門、横向きにあつて兎の皮の無袖衣を着て暖めて居るのは押
田佐吉、今一人は青山文平、武蔵屹度見て居たが、政「扱ては賢東齋
の弟子青山文平、押田佐吉、澤田奎左衛門、此蛇峠の頂上に狐師と狐

蔵 武 本 宮

着し、其の寶賊を翻らいて居ると見へる、いで其の儀ならば敵の片
割れ、衆人の助けに討取り呉れんと柄に手を掛けて見ると、押田佐
吉の側に鐵砲があるから、鐵砲ぢやア逆も宮本でも敵はない、飛
具では到底、凌ぐ事は出来ませんから、三十六計逃げるに術を
荷物、物を西行背負に背負て終ひ、尤も長の旅をするのを大きき荷
物はございません、ホンの着替へが一枚位の大剣を腰に打込み、小
柄を抜いて、蕨壁をビリ／＼と切りさばいて、其所から密と飛出し
笠も草鞋も置きばなし、星の光りを使い、透して見ると、道が閉
て居るから、夫をスタ／＼政名は急いで逃げ出しました、後ろに
當つて人足の開ゆるに依つて、武藏政名体を屈んで振返ると、押田
青山澤田の三人が追駈けて来る様子、

第 卅 四 席

チラ／＼見ゆる火繩の光りに南無三寶と武藏は体を縮めて、駈け

蔵 武 本 宮

ながら四邊を見ると、根の大樹があり、まするから、其の蔭へヒタリ
と飛込み、体を縮めて、支度をいたし、右劍左劍を抜、掛け待つたるに
ドーンと一發砲聲高く飛來つたが、武藏政名の隠れて居る根の真
ッ只中を大地より六尺ばかり離れた所へ、モロに彈を撃込む、ア
ッといッて、武藏政名故意と大聲を揚げたので、占めたぞ、手答へあ
ッたりと一文字に飛來つたが、板の蔭を向ふへ出やうとする、右
に持つたる來左衛門國次の大劍、エイッといッつたるに、板の蔭を出
やうとした押田佐吉の首をコロリと討落す、アッといッて驚ろいて、青
山文平、澤田壘左衛門、扱ては武藏存命なるかと、抜き連れ、切
て掛るを、宮本カラ／＼と打笑ひ、政汝如き鐵砲に揺るべき武藏
にわらず、敵の片割れ、御參ちれ、右劍左劍を振つて、打つて掛る、心得
たると、青山文平、左り手から討つて掛れば、澤田壘左衛門は、右より
討つて掛る、心得たりと、右左りと、兩人を引、討け、火花を散らして、戦

宮 本 武 藏

かッたが飛道具さへあければ何の物かは、武藏がヤッど一撃氣合
ひど共に踏込めば、青山文平の眞ッ向より鼻柱まで切下げる、血烟
り立つて文平が倒れるのを見て、澤田奎左衛門、敵はじと思ひしか
逸足出して逃げんとするを、政、卑怯あるぞと後ろさま飛込み來
つて右劍を上げ、エイッど討つたる、一刀に右の肩先きより乳の下
掛けて、只一討ちホッど息を吐いて、武藏大音揚げ、政、汝が罪は汝
を責める是にて、旅人の難儀もあるまいと、右劍左劍の血を拭つて
鞘に納め、是から武藏政名徹夜此絶頂を下ッて參る、左右する内に
東が白んで來たから、ホッど息を吐いて、暫時傍への石に腰を掛け
先づ夜が明けてから、里へ下るべしと、四邊を見廻して居ると、山
上は夜が明けても、里は未だ暗うございます、段々東が白んで來る
と、雪模様で、ドンロリして居ります、宮、本山の上から見下ろすと、道
か麓に疎に三十戸ばかり見へる、扱てこそ人家ありいさや下らん

宮 本 武 藏

とモウ夜が明けたから、道も明らかだに依ッて、彼の蛇峠をドンク
下ッて參ります、麓へ下りると、里ではチラホラ起きて居る、丁度
一軒の酒屋が、電の下を焚附けて居るから、政、老爺許およ、老、お
早うございます、且、那樣は、昨晚蛇峠を越へてお出でなすッたので
ございますか、政、左様、飛彈より信濃へ援けやうと存じて、遂々蛇
峠を越へて參つた、老、へ、エイ、御氣丈な方で在らッしやいます
千、那所は蛇の巢でございます、中々尋常の人には越へられませ
殊に、彼方から登ッて來ると、頂上に家が、一軒ございます、政、然れ
ば、あつた、老、那所は、表向き獵師のやうでございます、が大盜賊だ
さうでございます、宜くマア難儀にお出逢ひなさいませんだッ
た、千、政、左様、其の獵師の家へ一泊いたしました、夫、夫では、旦那様がお
分ッたから、皆拙者が退治して終つた、老、へ、エイ、夫では、旦那様がお
退治なすッたのですか、夫、ちやアモウ、是からは、其の愛ひもござい

ますまい 政、あゝいともく、旅人の愛ひは何にもない 考、夫はさ
うも有難う存じます、是まで彼奴等が居るんで、旅人がどの位の難
儀をするか知れませぬ 政、併し老爺酒を一ばい廻けて呉れ 老
承知いたしました、政、夫から御飯が出来たら持ッて来て呉れ
老承知いたしました、何れも美味お肴がございませぬが…… 政、イ
ヤ、なんの肴は好まん 老、只今御飯は直さ出来ませぬから、老爺はお
膳を拵へて持ッて来ると、武藏政名は一口飲つて夫より御飯を食
べて終ひました 政、老爺や少々、是へ寝かして貰ひ度ひナ 老、サ
ア、お寝みなさい、木の筒切りの枕を貸して呉れて、汚ない二枚
折りの屏風を枕許へ立て、呉れましたから、武藏政名は其の内へ
横にあり疲れて居るから前後も知らずに寝て終ひました

第卅五席

何時だか知らぬい、が人聲で武藏政名目が覺りました、幾ら疲れて

寝て居ても大望を抱へて居る人だから迂闊な寝方はまませぬ、人
聲が耳に這入り屏風の蔭に聞いて居ると、甲、ナア同役、先づア
當時日本一の先生といふのは我れ等の師匠だ、其の外に日本一
はあるまい、乙、さうとも、武術の大名だ、屏風の蔭に聞いて
居た宮本は、政、扱てはト、傳先生此近傍にお住家と見へる、是は塚
原先生の御門人であらうと、尙も聞いて居りますと、乙、無論日本
一の先生といッたら、ナア同役拙者の師匠だ、甲、左様、話を
て居る所へ、十二三にある小僧が、瓢箪を擔いで這入つて参り、小
伯父さんお酒をお呉れ、老、オ、お小僧かい、何だか雪が降りさう
だ、小伯父さん真正に雪が降りさうだね…… 甲、どうだい、同役
我々どもは日本一の師匠を取ッて仕合せだ、小伯父さん、甲、
何だ、小僧、小伯父さん、達は先刻から日本一、といふが何所で
黍圍子を拵へて賣つて居るんだい、甲、小僧、黍圍子ではさ、い、日本

宮 本 武 藏

一の劍術使ひといふのだ 小成程伯父さん日本一の劍術使ひを
知つて居るかい 甲日本一を知らんでさうする小僧貴様は日本
一の劍術使ひを心得て居るか 小夫は伯父さん乃公は小供だか
ら日本一の劍術使ひを知らぬぞを知る謂れはない併も日本一の劍術
使ひに先づ常陸の國の住人で東條といふ所に居た飯篠山城守家
直入道長威齋といふのが伯父さん日本一の劍術使ひだせ是は日
本の武藏の祖人といつて宜い位だ乃公の所の隠居がさうい
つたぜ 甲さうよ夫は世に亡き人だ 小世に亡き人だがねマア
此人が日本一だ其の次ぎが飯篠山城守の弟子で杉本備前守紀政
元といふ先生がある此人は二十二度の合戦に大將の首を七十二
討つたといふ剛い先生だね此人は常陸の高天ヶ原で討死をえた
其の次ぎは杉本の弟子の上泉伊勢守藤原秀綱といふ先生があ
る是は一万人の弟子を取立つたといふ孫弟子まで入れると三万

宮 本 武 藏

八千人もあつたといふ 甲成程 小其の上泉伊勢守秀綱の弟子
で師匠に勝つたといふのが塚原卜傳といふ人だ其の塚原卜傳か
亦是足利十三代將軍義輝公の御前で十八人の劍術使ひを對手へ
廻して勝負をえて後れを取つた事があるといふ吉岡太郎左衛門
といふ人があるが後に二人をいといふので無二齋といふ名を貰
つたといふが大變な先生だね伯父さん其の人達のお弟子かい
甲中々小僧貴様は宜く心得て居る、我々は左様な者の弟子では
ない 小さうかい、シテ見ると日本一といふのは其の位のもの
だぜ日本一といふやア其んちものだが跡は日本二か三にあるのだ
甲夫はマアさうだが我々の師匠といふのは越前敦賀の住人伊東
彌五郎友景後に入道えて一刀齋とある 小成程伯父さん夫はね
私ゑは小供で氣が注かかつたが伊東彌五郎先生は剛いさうだ
ね伯父さん天正八年八月十五夜に相州の矢倉澤といふ所で北條

宮 本 武 藏

百四十
一の劍術使ひといふのだ 小成程伯父さん日本一の劍術使ひを
知つて居るかい 甲日本一を知らんでどうする小僧貴様は日本
一の劍術使ひを心得て居るか 小夫は伯父さん乃公は小供だか
ら日本一の劍術使ひを知らぬぞを知る謂れはかい併え日本一の劍術
使ひに先づ常陸の國の住人で東條といふ所に居た飯篠山城守家
直入道長威齋といふのが伯父さん日本一の劍術使ひだせ是は日
本の武藝の祖人といつて宜い位だ乃公の所の隠居がさうい
つたぜ 甲さうよ夫は世に亡き人だ 小世に亡き人だがねマア
此人が日本一だ其の次ぎが飯篠山城守の弟子で杉本備前守紀政
元といふ先生がある此人は二十二度の合戦に大將の首を七十二
討つたといふ剛い先生だね此人は常陸の高天ヶ原で討死をえた
其の次ぎは杉本の弟子の上泉伊勢守藤原秀綱といふ先生があ
る是は一万人の弟子を取立つたといふ孫弟子まで入れると三万

宮 本 武 藏

八千人もあつたといふ 甲成程 小其の上泉伊勢守秀綱の弟子
で師匠に勝つたといふのが塚原卜傳といふ人だ其の塚原卜傳か
亦是足利十三代將軍義輝公の御前で十八人の劍術使ひを對手へ
廻して勝負をえて後れを取つた事があるといふ吉岡太郎左衛門
といふ人があるが後に二人あといふので無二齋といふ名を貰
つたといふが大變な先生だね伯父さん其の人達のお弟子かい
甲中々小僧貴様は宜く心得て居る小我々は左様な者の弟子では
ない 小さうかいシテ見ると日本一といふのは其の位のもの
だぜ日本一といふヤア其んものだが跡は日本二か三にあるのだ
甲夫はマアさうだが我々の師匠といふのは越前敦賀の住人伊東
彌五郎友景後に入道えて一刀齋とある 小成程伯父さん夫はね
私えは小供で氣が注かぬが伊東彌五郎先生は剛いさうだ
ね伯父さん天正八年八月十五夜に相州の矢倉澤といふ所で北條

宮 本 武 藏

の家來小藤太勘解由左衛門といふ人を始め五十八人を月の傾むく木下關手くらがりは一太刀宛切つて回はし止まる所は眞の一刀にゐるといふので一刀流と名をたさうだが此伊東彌五郎といふ人の弟子かゝい 甲「恐れ入つたね、小僧どうも貴様は宜く物を知つて居るナ、其の伊東彌五郎の弟子でもない 小「未だ違ふのかい 甲「然れば其の彌五郎といふ人のお弟子で丸山逸藤太といふ者の我々は弟子だ 小「何だい伯父さん丸山逸藤太……伊東彌五郎の弟子で、へー！伯父さん、丸山逸藤太といふのは聞いた事がないが夫が日本一かい 甲「左様、成々の師匠、日本一だ 小「其んをのは伯父さんの的にあらないせ、日本一もお尻の方から日本一ぢやないか 甲「何だ、尻の方から日本一だ、不埒な事をいふ奴だナ、勘解由らんは依つて、サア此勘解由は返さんぞ」三人の武士は怒り出た

第卅六席

宮 本 武 藏

小僧は 小「冗談いッちやア往けかいよ伯父さん其の勘解由は万屋のちやアかい隠居のだよ、早く返してお呉れ、使ひが遅くると隠居に叱られるから 甲「何といッても勘解由は返さない 小「往けかいよ伯父さん、勘解由を返して呉れかいと雪が降りさうだから 甲「何が降りさうでも構はない、貴様は高慢な事をいふから、勘解由一本使つて、貴様が勝つたら勘解由を返して遣らう 小「何だい、勘解由を使つて勝つたら勘解由を呉れる夫は冗だ、私えは小供だもの、逆も敵はない、第一誰と剣術を使ふのだい 甲「拙者とやるのだ 小「伯父さんお前とかい 甲「然れば 小「さうか、夫やア譯はない 甲「ナ、此野郎、譯はないとは何だ、人を馬鹿にした小僧だ、サア参れ 小「伯父さん何所へ行くのだい 甲「先生の道場で立合ふのだ、勘解由をアラ下げて小僧を連れて出て行く宮本屏風の内から見て居たが、政中々小僧宜く物を心得て居るナ、若し小僧が危なかつたら助け

宮 本 武 藏

て遣らうと政老草鞋を一足買ッて呉れ夫から笠を一蓋老
且那樣お武家様のお被りあさるお笠はございませぬ政ア、宜
い、雨具は此方に持つて居るソコで三度笠を買請け草鞋をは
いて宮本は木劍を背負て跡を見へ隠れに尾て来る汚かい道場
如何にも手狭で武者窓から宮本が覗いて居ると正面に四十恰好
の人物先生丈けに見て居ると甲「小僧一番参れ小ねへ伯父さ
ん乃公は小供だから太く打ッちやア往けかいよ竹刀で立合はふ
木刀で打たれて堪るものぢやアない甲「宜しく竹刀でも宜い
小「早く隠居が待つて居るから瓢箪を其所へ置いてお呉れ甲
瓢箪ばかり気にするナ、サア来いヤッといふと立上ッた小僧は片
手で附けて居たが小「成程伯父さんお前は是で劍術をどの位
稽古したい甲「拙者は三年稽古をした小「三年……三年習ッて
斯んるものかい寧ン劍術を止して何か伯父さんに供はッた事か

宮 本 武 藏

あるだらうから夫をやッた方が爲めにあるせ甲「黙れッ何だ
此野郎高慢痴奇な事をいッて大さにお世話だ小「宜い伯父
さん行くよ頭だよソラ、エイッ」と頭の天邊をボカと打ッた小「宜
い伯父さん乃公が勝つたから瓢箪を持つて行くよ乙「小僧
待つて一人に勝つても往かん跡の二人を負さなければ瓢箪は
返さかい小「往けかいよ遅くあッて終ふ早く出してお呉れ」亦
出るのを小「宜いかい頭だよ出る奴も頭をボカと打たれる亦出
るのを頭をボカッ小「宜いかい伯父さん勝つたから乃公は瓢箪
を持つて行くよ逸待つて小「小僧中々貴様は旨いものだ拙者が
一本立合ッてやらう小「往けかいよ伯父さんは此道場の先生だ
からお前には敵はない逸「イヤ夫はナ、拙者は一流の指南をして
居る者であるから勝負いたして拙者が勝つても此瓢箪は返して
やる小「成程夫ぢやアお前は先生だから強からう私しが負けて

も瓢箪を返してお呉れ、サア早くやらう願て丸山逸藤太、竹刀を取
つてやつと身構へた。小「イヤ、伯父さんお前は何かの先生の
い 逸先生だ。小「ア、さうかい何だか知らぬが弟子も先生も
同じやうだ。逸何だ。此小僧……宮本武蔵窓から見て居たが
政是は小僧の方が餘ッ程強い、下手な先生があるものだ」と見て居
ります。小「宜いかい伯父さん、行くよ、イヤ」と頭と見せて飛込
丸山逸藤太、心得たりと頭へ来ると思ふから、小手を上げて請けや
うとする所を屈んで。小「お胴……」とイヤといふ程、胴を打たれる
と丸山逸藤太「コ」退ッて来て、ズデンドーと引ッ繰返り、池
を吹いて目を眩して終ふ。小「弱い先生だね、伯父さんア、瓢箪
を擔ぐとトットコ」駈出す。宮本外で見て居たが噴飯した。政
何といふ弱い先生だ、扱は此小僧が隠居。といふのは事に依
ると、深原先生の手許に居る小僧ではなにか、然れば跡を尾けずんば

あるべからずと、小僧の跡を慕つて来る

第 七 席

左右をす内にテラ、降来る所の雪は、出巴の如く宮本は背負た
る襖を出して身に纏ひ、顔といふのは坊主合羽の類ださうでござ
いませ、笠を真深に爪先き登りの大難所、乗鞍ヶ嶽を差して登る
彼の小僧は踏馴れたる所と見へて羊腸の大難所をば、瓢箪を肩に
引ッ擔ぎ。小「ホー、ラ、ホラ」雪が降ッて来た、降ッて来た、コリヤ
逆び半分に駆け上ッて行く、流石の宮本息が切れて思ふやう
に足が進まぬ、其の内に遂々小僧の姿を見失つて終ひ、また
落膽、さて武蔵政名昇つて来る内に、實に四邊は一面の銀世界と
ります。宮本振返ッて見れば、天に白龍の鱗、まじり地に白狐の走れ
るが如く、四方の梢に時をあらぬ花を咲せたるかと怪まされ、細かに
降るは紙片を散らすに異ならず、熱々眺めて宮本は、政、實に美事

藏 武 本 宮

に降る雪か我れは雪中に修行をさすも何の物かは御主君清正
公は海山越へて遠く朝鮮の地へ御渡海嘯や暑さに兜の八幡座を
焦え窓風に扇を吹驅され雨に打たれ雲に濡れ御難儀もあらん主
の御難儀に比較せば我れは修行の身の上なり何ぞ憚れる事のお
るべきやと主を思ふて武藏政名雪中に立直り人跡絶へたる處々
眠々たる山中にト傳先生のお住家は何れあるやと見廻せば何方
あるや所在も知れず折るも耳朶に響き渡る笙の音色に宮本は扱
てこそ人跡絶へたる山中に笙の音色は定めと傳先生のお住家
からんいさや先生の庵を尋ね参らせんと音色を便りに進んで参
る丸窓の内に方つて洩れ来る笙の音色は何時まか止まり扱ては
雪中に斯る山中へ人の登り来りると覺へたりと丸窓を開いて見
れば一人の修行者門邊に佇み居ればコレは御修行者斯る雪
中に難所を踏迷ひ玉ふは塵かえ御難儀をらん武藏政名は空の内

藏 武 本 宮

より主人の様子を見れば願より胸に垂れたる袴は銀を透べたる
ばかり綺麗なる坊様扱ては是ぞ塚原先生をらんと心中に思ひ
政某老事は飛彈から信濃へ扱けんといれたる斯る大雪にて歩行も
かり難く何卒一夜のお宿を願ひ度きものでござる 老サア
遠慮召さるナお構ひ申えもいたさんからお泊り下さるやう 政
夫は千万忝けなえ然らば御免……武藏は笠を取って下へ置く
老小僧や早くお洗足を上げろよ 小ハイと答へて最前の小僧温
湯をば盥へ汲取りまえて 小御修行者足を洗ひをさるやう
政コレハお忝けなうござるお構ひ下さらんやうに是より武
藏足を洗つて上り敷居越えに両手を仕へ 政扱て今晚は計らさ
りき御富家へ御厄介に相成り有難く斯申する某老は生國は肥後
の國阿蘇ヶ嶽神職の三男瀧本又三郎と申する者にて武藏修行中
にございます 老コレハ御修行者御町場あるか言葉武藏修

行にて諸國を遍歴され、嘸や御姫様でござらう、併え是も皆武藏
 執心の爲めお察し申す、何はさくとも夕飯を召上るやうに、是よ
 り夜食を馳走あて呉れます、彼の老人も夕飯を食し、老先づ是
 へと一間へ招かれます、火鉢の正面に座を構へる、山家住んであ
 るから火鉢といつても、木の根ッ子の中を剥抜き、まて火鉢に
 ッて居ります、一寸亦通常の角火鉢から見ると、奥床といものであ
 ります、宮本武藏左手の一間を見れば、正面床の間には、銀貫指糸絨
 糸の鏡、一領、同じ毛糸の兜、一剣、具足櫃の上に飾り立ッてあり
 ます、彼方の長押には、武藝十八般の道具が飾り立ッてあり、
 万巻の書物が、堆高く積上げてあるのは、如何にも奥床まうとさ
 ます、老扱で御修行者何方から何方へ御修行でござるかと尋ね
 に、武藏政名是まで修行をまて来た事を物語ると、彼の老人が聞い
 て、願の御を熱であがら、老夫は嘸や御姫様であつたらう、武藏

の話を聞いて、機嫌宜くいたえて居ります

第 卅 八 席

ソコで武藏政名が武藝の話をして仕掛けて、故實を聞うとすると、彼の
 老人は眼を閉ぢて他所を向いて居る、依ッて武藝の話をして、外
 の話をすると、大層面白がッて、亦話を初め、所が宮本武藏は
 昌安寺村の昌安寺の泰山和尚に従ッて、佛學を宜く心得て居る人
 だから、佛道の話の初めると、彼の老人、悉く喜こんで、老扱で、
 お若いに、似合はず、宜く佛法の事を御存じだ、誠に、老夫も斯様か
 お話を承はるの、は何より、樂老み、年を老ては、斯るお物語りを伺ふ
 外に、樂老みはない、先づ此、激老き、雪あれば、急に雪解けもある、
 ヲア、御怒と御逗留あッて、雪解けを待ッて、出立あるやうに
 と、誠に親切の言葉に、武藏も大いに喜こんで、政誠に有難き仕
 合せ、仰せに、従がひ、雪解けまでお世話に、相成るでござらうと、宮本

武蔵は其の座を立て居座の側へと参ります年を老ます
 と眠氣が早く差ます其の代り朝は早い彼の老人は日が暮れる
 と直ぐに寝て終ひます跡は小僧と武蔵と居座の前で暖りあが
 ら宮本は彼の小僧の様子を見詰めますと中々尋常の者でない
 小切て御修行者彼此の座敷へ寝床を延べて置きましたから何時
 でもお寝みなさいますよ 政夫は千万忝けをい……併えお小僧最前
 丸山逸藤太の道場でお立合ひになつたが美事をお腕前である十
 小何かい伯父さん先刻私達が立合つたのを見て居たのかい 政
 然れば 小さうかい那所の先生は伯父さん弱いなね那事を事で一
 流の先生が勤まるものぢやアない呆れ返つた弱い奴だ 政全た
 く弱いなお小僧は大層宜く御術が出来たが御隠居に教はるの
 かね 小左様でございます隠居が毎日教へて呉れば宜いが中
 々隠居は不精だから氣に向くを教へて呉れるがね氣に向かない

と幾日でも教へて呉れないから……と覺へる事が出来ませんよ
 政ナニさうでない中々お小僧感心をお腕前未だ寝るのには早い
 一本お稽古を願はうか 小さうだね伯父さん一本稽古をえや
 うか併えね當家の隠居は目覺いから直ぐに目を寝すからね知れ
 ないやうにやませう 政結構く 小夫ぢやア此方へお出で
 ませい小僧先立ちにあつて密と雨戸を開け 小ソラね伯父さん
 茲だと雪は降込まないえ雪明りが差すから宜うございませう
 政結構だナ 小伯父さん太く打殿ッちやア住けないうよ立えは小
 供だから 政どういたえて打つ所ぢやアない逆も私しは敵はあ
 いサア稽古をえませう武蔵政名が袋の中から二本の木劍を取
 すのを見て 小伯父さんお前は何かい二本使ふのかい 政左様
 小へエー夫りやア伯父さん詰らない冗な事だよ當家の隠居がさ
 ういつて居るぜ世の中に一本の竹刀木刀でさへ自由にならん

宮 本 武 藏

に二本使はうといふ奴の了簡が分らない天二物を與へせとかい
ッて、兩方旨い事には伯父さん使へるものぢやアないよ、當家の隠
居がいふのには、今二刀を使つて満足な奴はない、併し風の便り
聞いたのに肥後熊本加藤の家來に宮本武藏といふ小僧があるが
是がマア二刀を使つて劍術使ひになれさうだといつて居るが
お前は宮本の弟子かい、政名聞いて驚ろいた宮本の小僧とは恐れ
入つた、政イヤ私は宮本の弟子ではない、源本又三郎と申あて肥
後の國阿蘇ヶ嶽神職の三男である、小成程夫ぢやア伯父さんは
宮本の弟子でも何でもない、獨流で二刀を使ふのかい、政左様
小ウーム伯父さん分つた、お前は阿蘇ヶ嶽の神職の三男といふか
ら神官の子だね、右の手に鈴を持つて左りに御幣を振つた解が抜
けぬいから、兩方に獲物を使ふのだね、武藏政名が聞いて、何ば神官
の侍だつて御幣と鈴を振つた解が脱けないやと、中々小僧面白

宮 本 武 藏

い事をいふと笑ひながら、政左様、かく小僧其解もあるナ、小
うだらう、左もあければ、兩方獲物と脱れるものぢやアない」
第卅九席
順て彼の小僧も木劍を取つて、小宜いかい伯父さん、太く打ちッ
こなしだよ、マツと星眼に付けるから宮本は例の双足に立つて、右
劍左劍をブラリと提げて身構へる、小僧見て居たが、小オヤッ、妙
な構へだ、珍らしいナ、斯うやつて太刀を提げて、双足に立つ、天庭か
ら爪先きまで明透した、隙だらけだと思つて、打込テツと、逆も是り
やア敵はあゝ、八方破れの構ひだナ……是を聞いて武藏が、政心をし
たのは、今までに宮本の八方破れといふのを見切つたのは、吉岡憲
注ばかりでございます、夫を此小僧が八方破れと見切つたから、流
石は彼の老人の仕込み、正しく卜傳先生に相違なしと小僧の体の
動作を見て居ると、中々どうして小供とは、御幣と鈴を振る腕前

エイヤツと互ひに少々な聲で矢聲を掛けて居たが彼の小僧が
ツト一聲叫んで打込み來った木劍太く請けると對手の手に響け
て氣の毒だと思ふから武藏政名一足踏込んで軽く十字でガツキ
と請ける吉岡憲法ですら十字に打込んだ位だから此小僧な
が打込むのは無理もないガツキと打込んで小僧が小オヤ
成程斯う來るだらうと思つたのだ旨い十伯父さん三又で請ける
のが早いものだ獨流で學んだ三又流かいエ、斯うと是を無理に
押破つて行く逆らはすワソソ請けて退られ引かうとする
と飯糊付けに附込んで來られるし無理に破らうとすれば右劍で
拂つて左劍で打たれるか左劍で拂つて右劍で打たれるといふの
だナ……武藏十字に附けて居たが其のいひ種に威心をした中々
先きの見へる小僧だと思つて居ります十字に打込んだ小僧が
小弱つたナ是は困つたぞ引くも出來ず押すも出來ず是よりやア在

けかい困つたといひながら小僧がヒョイツと右を見ると何時
の間にか雨戸を開けて頃の聲を撫でながら隠居二人が勝負をし
て居るのをコロコロ見て居るから小僧は驚ろいて木劍を引くと
駈け出した武藏政名も左り手を見ると隠居が出て見て居るから
是も驚ろいて木劍を提げてドン／＼駈出して終ふ一間の内へ這
入つて政どうだいお小僧小伯父さん隠居が覗いて居たね那
の通り耳が早い隠居だ一寸としても目聴いから直き目が覺める
明日になつて若し私しが隠居に叱られたら伯父さん謝罪してお吳
れよ政ア、左様か小御修行者を對手に劍術を使つたなと
嚴敷叱言をいふからね謝罪してお吳れよ政宜いとも私か明
日謝罪うから小どうだい伯父さん今夜は劍術の話をしなから
此所へ一處に寝て終はう政夫が宜い是から小僧は武藏政名の
側へ自分の寢床を敷いて寝ながら四方山の話をついたして居りま

するが中々武蔵の事は宜く心得て居る小僧扱てトロ〜と睡眠
まする宮本は他人の家であるからとて色々閑々として居る人
はさういから翌朝早く起きて嗽手水を使つて終ふと隠居は早起
だに依つてハヤ朝飯を食して仕舞つたと見へて居座の前に立膝
をして暖つて居ります 政扱て御隠居お早うございませぬ昨夜は
南柯の一夢を破り申し譯次第もございませぬ 老イヤ〜御
行着決して其のお説には及ばん流石は武蔵執心にて諸國を御
行さる御仁中々小僧をどの及ぶ所ではござらん失禮だが御
行者は肥後の國阿蘇ヶ嶽の神職の三男瀧本又三郎といふはお
りであらう十全たは肥後熊本加藤家の臣宮本武蔵と仰せられ
るお方でござらう武蔵政名驚るいて跡へ退り 政先生の御
力恐れ入り奉つる如何にも瀧本又三郎とは假の名にて本名宮本
武蔵政名でござる 老さこそあらん小僧を對手に二刀の使ひ振

り尋常の者に斯二本の太刀が使へるものでない手前は上泉伊勢
守秀綱の門に下りし塚原小太郎が成の果名さへト傳と改めて最
早麒麟も老ぬれば驚馬の比叡斯山中に隠遁いたして當時世の中
を避けて居る併え宮本氏には只武蔵の御修行でござるか但しは
何かお望みあつての御修行か如何で

第四十席

此時に武蔵政名両手を仕へ 政扱ては塚原大先生にて候ひしか
知らぬ事とは申し乍ら御無禮の段御用捨下され度し實は某も實
父の仇を討たんとて修行を仕つります トナニ御實父の敵失
禮ながら腹藏なくお物語りあれ 政實は先生某も實父は毛利
家の臣吉岡太郎左衛門無二齋と申する者にて過ぎし天正十八年
九月十三夜萩の小路昌安寺村の出外れ土橋の際にて佐々木賢良
齋巖流の爲め鉄砲にて敢なき最期を遂げ實父無二齋が營の敵

流を討たんと尾狙ひまする然るに諸國修行中作州津山に於て吉
問憲法に出逢ひ實は先生へ近附き巖流は先生の門より出でし
なれば賢東齋が太刀癖を覺へ來れとの注意依つて雷山へ昇りお
住家へお尋ね申し上げたる事でごさる委細を聞いてト傳先生
を打つてト扱は吉岡無二齋先生の御實子でござつたか知らぬ
事とはいひながら失禮いたしました貴所がお父上無二齋先生とは過
ぎし頃足利義輝公の御前に於て此ト傳も勝負三本を好みしが、
實に昔しを思へば涙の種惜むべき奴は賢東齋彼れは以前六角
甲斐道と申して我が門弟故あつて我が弟子とはせしも性來宜か
らざる曲者併し是までに巖流にお出逢ひになつた事がござるか
ソコテ宮本が前回申上げて置いた播州姫路の一條を物語る夫
を聞いて塚原先生ト成程卑劣未練な奴其の節の立合ひには實
山流の振杖とナ扱々惜い奴幸ひ巖流の太刀癖は老夫宜く覺へて

居る人間は悪い奴だが巖流には非凡な太刀がある此太刀は尋常
の者には凌げんが此太刀だに凌げば巖流を討つ事雞卵を礫に擧
石に當るが如く何の物かは巖流を討たせ申さう暫らく手前方に
て此太刀癖を御修行なさるやう師弟の間柄であつたから塚原ト
傳宜く是を心得て居るから御自分が巖流になつて宮本へ巖流の
太刀癖を教へてやらうといふト傳程の先生が巖流に代つて巖流
の太刀を使つて呉れるのだから此凌ぎが附くやうから眞物の賢
東齋の太刀を凌ぐは何でもございませぬから宮本武藏も大きに
喜こびましたソコテ傳がト今朝は老人が一本お對手に相成
るでござらう政夫は千万忝けなると宮本は直ぐさま支度をい
たしますると傳先生は別に支度もせず居座の前に立膝をして左
りの手で顔の髯を撫で自在健は鍋が掛つて居る手を濡養て居り
ますトサア宮本氏遠慮召さるナ隙あらば老夫が眞向より

宮 本 武 藏

微塵に砕くも苦しくござらんぞ 政然らば先生御免を蒙る武
藏跡へ退つて右劍左劍を押ツ取り、エイヤツと右劍を真向うに構
へ左劍を星眼に構へる、小僧は側で見居たが、小成程道理で強
い譯だ、宮本ちやア迎も乃公は敵はない恐ろしい氣組みだナ……
両手を仕いて目も放さず、武藏の体の動作へ目を注げて居ります
ト傳は竹の火箸で居爐の中の灰を掻廻さながら左りの手で髭を
撫で、トウーム宜い氣合だ、さこそあらん美事を氣合ひ、オット其
所を握ます、今一息ウムと氣を張ツて、其所で握むと太刀が鈍
る今一息、其の氣合ひが欲きものでござる、ア、お美事である、武
藏の氣合ひに氣を留めて居る、武藏政名は勝負をしないで構へた
ばかりで、ト傳に息を上げられるやうな心持ちがいたまますから
打ちが出さうなものだが、對手が星眼にでも附けて居れば、目途が
あるから飛込んで行けるが、何しろ無念無想に構へて居るのだか

宮 本 武 藏

ら流石の武藏打ちが出ません、宮本も名人の段に足を掛けて居る
から向ふが見へるので、打ちが出ない、蛙の頬被り、蜻蛉の鉢巻、向
ふの見へないへボク、劍術は對手が無手だと思ふから、隙も何も
其んを事は構ふものか、第一分らないから、お先き眞ッ暗に飛込ん
で行くが、心得のある人は無暗に打ちを出えませぬ

第四十一席

トソレ其所だト傳の一聲に、政御免……と宮本真向うに構へ
たる右劍、風を捲いて打下ろすアツヤト傳打られたかと思ひさや
ヒラリと体を捻ツた其の早き事、是等を飛鳥の早業ともいふべ
か、失策たりと武藏が左劍を直え打つて掛るを何時の間に持直え
たるか、竹火箸にて、トアイツ、丁と左劍を拂ふ細い竹の火箸で構
はれ、宮本は左りの利の先生太刀を落される事はなさうなものだ
が、後だから逃りません、指の締りぎ殺んだか、左劍を彼方へ打落さ

宮 本 武 藏

れる失策た宮本が右劍へ双手を掛けて打込み来るをト傳竹火
箸でヤツと拂ふ途端にエイと叫んで宮本が打込む竹火箸の眞
中より打折つたトオ、お美事だト傳はヤツと餘れる竹火箸
を磔に打つ心得たりと武藏体を開いて彼方へ飛走再飛込み來ッ
て打下ろすをト傳体を捻り自在に掛つて居る劍の蓋へ手が掛
るとヤツと宮本の木劍が下つた所を劍の蓋にて上からムンズと
押へるサア取らうとえたが取れないウムと武藏の氣合ひが這入
る所をエイツと劍蓋を引いたから武藏は思はせ小手が上つた其
の下から劍蓋にて武藏の顔をヤツといふと目潰れに押へる熱い
の熱くさいの手を湯煮て鍋の蓋へ手の泡が附いて居る宮本の顔
へ幸のヌメリが附着たから其熱さといふものは堪りません、ッ
ト宮本は跡へ退つたが政今一本……と取直ま打込み來ッ
た太刀風にトエイツとト傳が一聲氣合ひを打てば這は如何に

宮 本 武 藏

武藏政名木劍を持つたる儘ッ……と仰倒に反ると氣絶をえて終
ひまたた是を塚原ト傳が年來熱練いたたたる相氣の遠當といふ
術でございます是から武藏政名に活を入れたので心我れに返る
トイヤ中々宮本氏の早業老夫をこの及ぶ所ではござらん、恐れ入
つたるお業前、今年経たば天下に指折る名人にあらんと大層ト
傳が賞りまたた宮本は両手を仕へ政天下に高名の塚原先生計
らざりき御教等に預かり有難さ仕合せト何の何の美事をお氣
合ひである是を飛彈と信濃の國境乗鞍ヶ嶽に塚原ト傳と宮本武
藏が鍋蓋試合と英雄武者鑑をどにも出て居ります一説には伊藤
彌五郎と鍋蓋試合をまたとも申えまするが貞國はト傳で辨じま
する扱是から塚原の手許にわつて宮本が巖流の太刀辯を敵はり
まする何方も錢竹刀を持つてト傳は一々講釋をまをがら巖流は
斯う構へて斯う隙を見せて打込む斯う請けて戦つて居る是か巖

宮 本 武 藏

流の凡非だといつて塚原先生左りの手を突いてドーと倒れます
る其の時竹刀を陽へ下げて倒れる故ゆゑに敵が倒れるから踏込
んで討うとする倒れたが早い其の突いた左りの手の響きで起
直るが否や横にエイツと振込んで来る竹刀に宮本の腰をギかと
打つ上宮木氏此太刀でござるぞ巖流が三界一無敵流燕返えの
術といふのは茲で燕が往來を真直ぐに走つて行きヒラソ引返え
て来る其の早い事人間業には出来ぬ術でありませぬ燕が引
返えて来るやうな早業上是が賢東齋の一種編出えた燕返えの
太刀倒れながらに体を圖て居る踏込んで討うとすれば起上りさ
まに敵の利足を切つて終ふか但えは二の鬨を切るか此太刀だに
避ければ巖流を貶度討てるに相違ないから老夫がお對手にあら
うと根氣宜く賢東齋の太刀癖を教へて呉れます上是を凌ぐに
は宮本氏某しが外にお教へ申す所は無いが我等若盛りの時播州

宮 本 武 藏

花隈の城主戸澤山城守に従がひ學び得たる天狗昇飛切りの術と
いふのがある是を尊公へ御傳達いたさう武藏天へも送る心地を
えて喜ぶ此上天狗昇飛切りの術を教へて貰へば百万の味方を
得たるも同様でございます是から宮本は塚原ト傳に仕込んで貰
ふ事にあります

第四十二席

ソコデト傳が巖流とあり宮本の腰を打つ上ソレ其の氣合ひで
飛上るのだと教へます所が馴れない内は中々さうなれるもの
ではございませぬ毎日庭へ繩を張つて三尺位の所を宮本が夫
を飛越へる夫が樂に飛べるやうにさると一尺増して四尺五尺と
段々増して飛ぶ人間は是を仕やうと思つて出来ぬ事はござい
ません万物の靈長たる人間万物の司でございますから出来ぬ
事はないがどうも倦て終ふから仕方がない此時開始の小僧が年

期を入れて始終叱言をいはれ、怠惰やうでも、年期を勤め上げる内には、ほんち不器用な人間でも一人前の職人にはなれます、矢張り其の理屈でありまして、宮本程の人が稽古をするので出来ないので、遣はない、殊に武藏は早業の人でございますから、忽ち覺へる終ひには向ふへ飛ぶ事五六間上へ飛ぶ事三四間位は、何でもよい、ト傳が大層感心をして、ト夫丈け尋公に術が出来て来れば、モロ巖流に出逢つても大丈夫、サア参られよといふので、茲でト傳が竹刀を取つて、對手になり二三本立合ふと、サアといつて、武藏が打込んで来ると、タ、と退りながらト傳はド、と横に倒れる、サ、と宮本が踏込んで来ると、ト傳起上りながら、武藏の双足を拂つて来るから、宮本エイッといふ氣合ひと共に飛上る足の下へ竹刀が這入るので、トア、お美事だ、夫なら、ウ宜しい、此燕返しの本刀さへ、復さが附けば、巖流を討つ事何の手間暇要るべきか、斯ては片

時も猶豫を仕玉ふな、今若盛りにして斯る山中に長居をするは無用なり、速やかに下山あつて巖流を尋ねられよ、宮本武藏涙を流して喜こびます、斯う申し上げると、武藏政名が二日か三日で覺へたやうにあり、すが、中々どうしてさうは、往きません、丁度武藏は満二ヶ年といふものは、乗鞍ヶ岳に修行をして居つたのでござい、ます、愈々宮本がト傳に別れて出立をしやうとする時に、原下傳がト扱て宮本氏老夫が一ツの願ひがござる外の事でもござらんが、是に居る拙者の甥、友次郎、是れは我れ等が義弟、島村小才治の仲、義弟小才治は不幸にして夭折をいたし、母には、缺れ某老が手許に成長いたさせてござるが、手前は最早世の中へ出やうとは思はん、尋公へ此友次郎を献じるに依つてどうか、宮本氏塚原の家名は、兎に角、宮本家を相續いたさせ度ひと存する、尋公の養子にお貰ひ下さるまいか、武藏涙を流して喜こび、政誠とに先生のお言葉

宮 本 武 藏

願ふても無き幸ひ、斯る御子を下置かれるは生前死後の面目懸
に過ぎず宮本が承諾をしたので塚原は「上」切て友次郎、汝は島村
家を立てるに及ばず、また塚原の名蹟を相続するに及ばん加藤
家の臣宮本氏の家名を相続いたせよ、と申を聞かせますと島村
友次郎も大きに喜びます。茲で塚原ト傳が目の前にて宮本武
藏と島村友次郎に親子の盃をいたさせます。親子といふ所
二十も三十も年は違ひませんが、宮本武藏は御新造といふ者をお
へになりませんから御實子はございませぬ、友次郎は丁度十五才
でありませぬが、ト傳先生より目錄の許を請けて居るから、普通
の奴の免許より随かなもので、結構な子息を貰つて宮本は此友次
郎を養子にいたさせ、後に至り此友次郎が宮本八五郎政明と
あつて俗に是を二代目の無三四といふ、矢張り左利でございま
ると、二刀を宜く使ひませぬ方でありませぬ、寛永御前試合の時に、

宮 本 武 藏

木又右衛門と立合つたのは此八五郎でございませぬ、是からト傳は
吉日を選んで親子の者を立せませぬ宮本親子は大いに喜び、長
らく住馴れさせたる飛騨と信濃の國境乗鞍ヶ岳を立立に及ぶ、是
より武藏は友次郎と共に、佐々木賢東齋の所在を尋ねる

第四十三席

是より宮本親子は長門の下の關へと渡りまして夫より長州萩へ
参りませぬ、昌安寺村の昌安寺泰山住持に面會をいたさせ、久
々の物語り未だ巖流に出で逢さる話をいたさせ居りませぬ、尚
實父吉岡太郎左衛門無二齋の法事をいたさせ、所が泰山住持の召
仕と見へて、和尙様只今、泰オ、御苦勞、大層早かつた、
宮本の顔を熟々見て居る年齢五十恰好の男、男恐れ入ります
が、貴所は吉岡無二齋様の御子息で平馬様と仰しやつた方では
ございませぬか、武藏政名も前名をいはれて、政然れば吉岡平馬で

宮 本 武 藏

ある 男左様で在らつたやいさすか、さうも幼少頃が未だ殘つて
居ります私くしも此長門の萩で産れまゝで、豊前の小倉に伯父が
居りますので暫らく小倉へ行つて居りましたが、今度マア此方へ
戻つて参りました、未だ手前も奉公いたして居ります、政ハ、マ
小倉に何が宜い武藝者は居るか、男左様でございませう、今度小
倉の立花様へお抱へに参りませう、佐々木官太夫といふ劍術使ひ
がございませうが、中々剛腕の腕前で、政好流だ、男夫は眞影流だ
さうでございませう、政眞影流だ、さういふ人物だかお前登へて居
るか、男左様でございませう、背丈は六尺近うございませう、髪でさ
ざいませう、政ハ、マア年齢は何才位おちや、男左様で未だ五十
には参りませう、政ハ、マア、政ハ、マア、政ハ、マア、政ハ、マア、
い方でございませう、マア、那れ程の武藝者は外にゐるまいといふ所
判で宮本心中に彼れは近江佐々木の一族六角源太夫の仲甲妻

宮 本 武 藏

塚原卜傳の門に下つて腕を磨き、佐々木賢東齊巖流となつた奴事
に依ると官大夫をさし、いふ名を命けて居るかも知れん、兎に角佐
々木といふ苗字を聞いては片時も猶豫はまて居られん、假令賢東
齋でなくとも参んでも構はん、夫が爲めに修行を志す武藏、さ
らば豊前小倉へ渡つて様子を見届けんと、武藏政名は即刻暇請ひ
を志す、萩へと立戻りませう、是から友次郎と二人再び下の關へ
赴きませう、夫より豊前の小倉へ渡らうといふのだが、御用船を待
つて居て相手を逃がせてはあらんから、御用船でなく武藏親子は
豊前企救郡小倉へと渡りませう、所が其頃には豊前小倉は立花
三河守益政殿領分、後には是を小笠原家が領して十五万石、未だ此
には立花家で六万石の城下でございませう、本家は筑後の國柳河で
十一万九千六百石、立花飛騨守宗茂侯であります、宮本親子豊前小
倉へ渡つて旅館へ着き、賢東齊巖流であるかないか様子を探る意

よ武藏政名仇討ちの書を立花家の家老立花三彌の手許へ上げやうといふ武藏仇討ちのお物語り、

席四十四第

武藏親子は小倉のお城下菊屋といふのへ泊りまゝて是より毎日様子を探して歩きます或夕景の事で深き笠を被つて武藏は御城内の廻りを窺つて居りますと大勢の若武士廻りを取巻き四十二節の熊谷笠にて面を包み細輪の内に四ツ目結の骨割羽織緋緋緋に小寶尽の裾取つたる野袴を穿き盲目精の足袋、珍緒の草履、寸伸の銀造りの大小、大道、狭きと大手を振つて来る姿は如何にも巖流に宜く似て居るから武藏は此方に付で様子を見て居る内に ○扱て先生然らば是にてお暇いたす 武今日は何々方に御苦勞でござつた挨拶をえて門を遣入るのに笠を被つて遣入る譯にはあらぬいから笠を脱て御門を階らうとまたのを見ると

播州姫路で出逢つた時には肩打つばかりの切下げ、今見れば怒髪で大誓に取上げては居るが紛ふ方を巖流あるに依つて扱てこそ卑怯の賢東齋當地に居るかと十分の見込みが附きましたから是より旅籠へ立歸つて参り、伴友次郎に右の話をいたえて早速に願書を認め家老の立花三彌へ願つて出でました立花益政殿は若年でございますから本家柳河侯から立花三彌、小野和泉、十時重兵衛といふ三人の家老を三河守殿へ附けて置きます其の立花三彌へ就て願ひを上げました願書を披いて大きに驚ろき、豫て太閤殿下より仰せ渡さもある夫には宮本當地に下つたいふのであるから早速武藏に面會をいたえて 三願ひ書の趣き委細承知仕つりまゝてござる早速本人を取逃がさんやう手配をいたすでござらう何所に宿をお求めでございますといふから 政城下の菊屋に逗留いたえて居ります 三左様でござるか是より三彌は家老

宮 本 武 藏

を附けて武藏を菊屋へ送り届けさせた夫から小野和泉と十時重
兵衛と三人の家老が内談に及んで片時も猶豫を居られんから
十分の手當をえて置いてから茲で佐々木官太夫を立花三彌の小
屋へ招きさせた官太夫は何事であるかと三彌の小屋へ参ります
ると三家老正面に扣へて居ります中にも三彌席を進んで三扱
て官太夫早速尋ねるが其方は佐々木官太夫といふのは偽名に
て實名は賢東齋巖流と申すであらう、巖流心中に大きに驚
き巖如何にも前名賢東齋巖流と申すであらう、巖流心中に大きに驚
木官太夫吉高と名乗て居るのでございませう、三ツム其の儀相分
ツた然らば天正十八年九月十三夜長門の國萩の昌安寺村萩の小
路土橋に於て吉岡太郎左衛門無二齋を鉄砲にて撃つたであらう
今武邊社會に於て汝が無二齋を撃つたる事を知らん者は其
其方佐々木官太夫と偽名を名乗て當家へ住込みよが賢東齋巖流

宮 本 武 藏

とあればお召抱へばあかつたのだ夫に就て當方では官太夫でも
賢東齋でも差構へはあいが此度吉岡無二齋の實子宮本武藏政名
實父太郎左衛門の代討ちをいたした度ひと願ひ出でたるに依つて
其方も塚原卜傳の高弟天下に高名の巖流をれば尋常の勝負をい
たまた運強く汝が腕前勝り宮本を返り討ちにしたるをば當方よ
り太閤殿下へ願つて廻れ晴天白日とさつて當家指南番に抱へ取
らすであらう、武士らも尋常の勝負をいたせ今は巖流運の極め
茲で地太羽太騒いでも往けなに見ると唐紙の外には大勢の者が
夫となく取巻いて居りますゆゑ殊に立花三彌十時重兵衛をば
何れも暇場往來の家傑で逆も齒が立たんと巖流も覺悟をいた
て巖御家老の仰せ有難く如何にも武士道の意恨止み難く、鉄砲
にて吉岡無二齋を撃取つたに相違とざらん、實子の武藏某を實
父の敵とあらば望みに任せて尋常の勝負いたして遣はすでござ

蔵 武 本 宮

らう 三夫でこそ隠れ武者者あり伊志御法だに依つて仇討ち當
日まで其方兩腰は預かるに依つて左様心得るまで巖流大小を預
けて終ひまえた、

第四十五席

是から賢東齋を大勢で送つて参り巖流の小屋の廻りは晝夜大勢
の輕装が固めて居ります尤も是には重役方も交つて居る、賢固
て居る連中は災難だが仕方がございませぬ方一賢東齋を逃がま
でもすると立花家に關する大事祈いたえてから宮本に右の趣きを
告げるから早速に武藏政名書面を認めて肥後の熊本長門の藏へ
と知らせました茲で肥後の熊本よりは養父の宮本武左衛門並び
に小代下総の兩名が豊前小倉へと渡つて参ります長門の萩よ
りは矢戸備中花房志摩守の兩名豊前小倉へと罷り越え、城下菊
屋に宿を求めて居る宮本に久々にて對面をいたしまえた、ツコデ

蔵 武 本 宮

漢方着の届けを立花三彌へ出ます、三彌自身に菊屋へ出向
まえて、矢戸花房小代宮本武左衛門と同道をて、武藏親子を菊屋
に止め置きまえて、三彌は小倉城内へと赴きまえて、四名の者へ立
花益致殿對面をいたしまえて、全く賢東齋巖流と知らずまえて抱
へたのであるから悪からず思つて呉れるやうにと御自身に四人
の者へお詫をなさいまえた、切て急よ敵討ち當日も定まらまえて
場所には灘島といふ事になりまえた、是が大層の評判に相成りま
て、小倉はいふも更なり下の關へも知れまえたから、船の往復のあ
る所だに依つて、其前日から船の手當を志て見物を志やうといふ
者が大變でございませぬ、さて當日に相成ると小代下総、宮本武左衛
門、矢戸備中、花房志摩守が船にて灘島へ乗込みます、積いて立花
家の三家老も船にて灘島へ先きへ乗込みます、時に宮本武藏は
菊屋の家にて、伴友次郎に向つて、政切て友次郎年來の大願成就

宮 本 武 藏

今日にゐるが併老野手は非凡の賢東齋流であるから、我れ等亦
返り討ちにあらんとも限らん、其の時に汝跡に留まり、我が敵も討
取つて呉れるやうに友次郎手を仕へ、友今日灘島へお供いたす
べきでござるが、私くもは却つて盗に扣へ、敵は千年父上巖流の爲
めに返り討ちに相成らば、及ばせながら友次郎が必らず賢東齋を
討取つて御存意を襲ぐ心得でございます、是丈け武蔵の方は氣丈
夫で、万一自分が討れても跡に友次郎が扣へて居るから、再び敵
討ちは老て呉れる、扱も武蔵は十分支度をいたし、目釘は前夜の
に取替へ、豫て用意の船へと打乗り、灘島差えて漕出す、其の内敵多
の見物、船漕出えて行くから、船と船とが打付るばかり、宮本の船に
遙か後れて只一人、巖流は船に乗つて漕出ます、勿論其の廻り
は立花の家來が取巻いて居ります、賢東齋を取逃がさんやう十分
の手當は老てあります、賢東齋も身輕に支度をいたし、大剣の

宮 本 武 藏

柄頭を下へ突き、鞘尻を搦いで船に乗つて居ります、何れも船を漕
立てる船頭の聲は水に響いて凄まじく、浪を押切り、皆灘島差
えて漕出えて参ります、

第四十六席

扱武蔵巖流の兩人、灘島へ上陸を致して、双方名乗りを掛け、武蔵は
左右の剣を天地に掲げる、巖流は星眼に附けて居たが、武蔵の様子
を見て、成程日外播州姫路の城内にて立合つた時から見ると、遙か
に腕前が上達して居る、何所を此奴強くなるかと思つた、互ひに
腕合つて居たが、矢聲を掛けて賢東齋も切込まぬので、右剣左剣を天
地に構へて居る所へ、突きに這入つて来たから、是では十字に請止
らぬれぬ、心得たりと、宮本は体を左りに開きながら、左剣で突さ
の一刀を拂ひ、右剣で真向うより煽つて来るを賢東齋、右剣を拂ひ
退け、さまに再び切込んで来るを、武蔵は右剣左剣で細うとまたが、と

蔵 武 本 宮

外す事は出来ません右の肩先きへ十分に切込まれ、筋限ながらに
巖流後へにドと倒れたるに、政如何に巖流、汝が燕返の極意
他かに宮本認めたり、賢東齋も聲高く、巖我れト傳の門に下り此
燕返の極意を熟練をえて以來、此太刀を今日まで打損じたる
事一人もなえ、然るに汝、此太刀を凌がれたるは實に宮本は名譽か
な、巖流其の手練に感服いたす、いさ近寄つて首を討たれよ、最早賢
東齋も是までありと持てる太刀をガラリと投げ捨てた、巖流も傲
慢の奴だが宜い覺悟で、武蔵の腕前に感心をえて最早手向ひもせ
き、宮本は巖流の様子を見て、政臨終の際に善道に立返り、實に惜
ひべき無藝者ながら是非をえ、今や汝が一命は宮本申え請けたる
ぞと豫て用意して来た兄の主水が最期を遂げた短刀を取出し止
めを討ち、實父の位牌を手に持添へて巖流を突きまえた、父兄の仇
巖流を刺止めれば是で望みは足りまえた、賢東齋の首を提げて是

蔵 武 本 宮

らまで巖流十字には打込みませぬ互ひに火花を散らして七八合
戦かッて居たが、ヤッて宮本が踏込んで来る二尺三寸の右劍に、巖
流は左りの肩先きから乳の下掛けて切込れたと思ひ、さや流石は
巖流切込む太刀風に、マッくと跡へ退る途端に、左りの手をド
と突いて仰に倒れる、武蔵は茲を振原ト傳に仕込れて来たのだか
ら、ヤッて飛込んで来る見物は一同占めた、くといふ内に巖流倒
れたが早い、か起さるが早い、か横に拂った、刀は是ぞ賢東齋の燕
返え、アッて驚ろく、一同の者、宮本は腰の番を切られたかと思ふと
エイッといふ矢聲と共に、宮本は空天に飛上る、武蔵は袴を裾短か
に穿いて居たのだが、飛上るのに足を縮めるから裾が垂れる、巖流
も空は拂てさせん横に拂ふ途端、宮本の袴の番を切ッ先で聊さか
刺落さされた、武蔵は天狗昇飛切りの術にて飛上つた、早業に、巖流
の呼吸が狂つた所を飛下り、さまたに左劍で切附ける、此太刀は巖流

門へ行く譯にもからないから、巖流の髻を切つて最期の際が美事であるから憎い奴には遠いさいが其腕前に威服をいたえて、巖流の死位は遊島へ葬むりまえた、人呼んで俗に巖流島と申します、日本三ヶ所下馬の一ツで此遊島へ馬で這入ると必ら遊馬をする後に至り武藏者は能々遊島へ来て賢東齋の石牌へ参詣を志して、腕前は宜く出来るから皆参詣に参つたので、巖流の牌前は線香花の総間は無いと志てあります、人間は悪い根性は學び度う、さいが武藏は巖流を學んでも悪くありません、扱一同は一時小倉へ引取り敵討ちも相済みたれば立花家へ厚く禮を述べ、宮本は長門へ歸り亡父亡兄の墓へ巖流の髻を手向け是にて目出度儀討ちも相済みまえたるから武藏は親族の内より人を遊んで吉岡の家名を相續せせて自分は熊本へ歸り宮本の家を相續いたえた、其内に文

藤五年清正公一度日本へお戻り再び朝鮮へ御渡海になつたが宮本は戰場のお供をいたたません然るに時を経て清正公は慶長十六年六月二十四日敢なく五十九才で御他界、加藤正左衛門忠弘公の代にあって、肥後熊本加藤家断絶をいたえたに依つて御自分縁家が小笠原家にあつたので是へ引取られまえた、後に小笠原家で三千石といふ大祿を給はり武藏は御主君清正公菩提の爲め剃髮をいたえた、宮本武藏政名入道二大立心とありまえた、御子息の友次郎は故あつて八五郎と改名をいたえた宮本二代の譽れを上げました、其の後武藏先生は正保二年八十餘才にして目出度此世を去つたといふ武藏社會に譽れを残した宮本氏の傳是にて大尾とい

宮本武藏之傳終

明治三十四年八月十日印刷
明治三十四年九月十五日發行

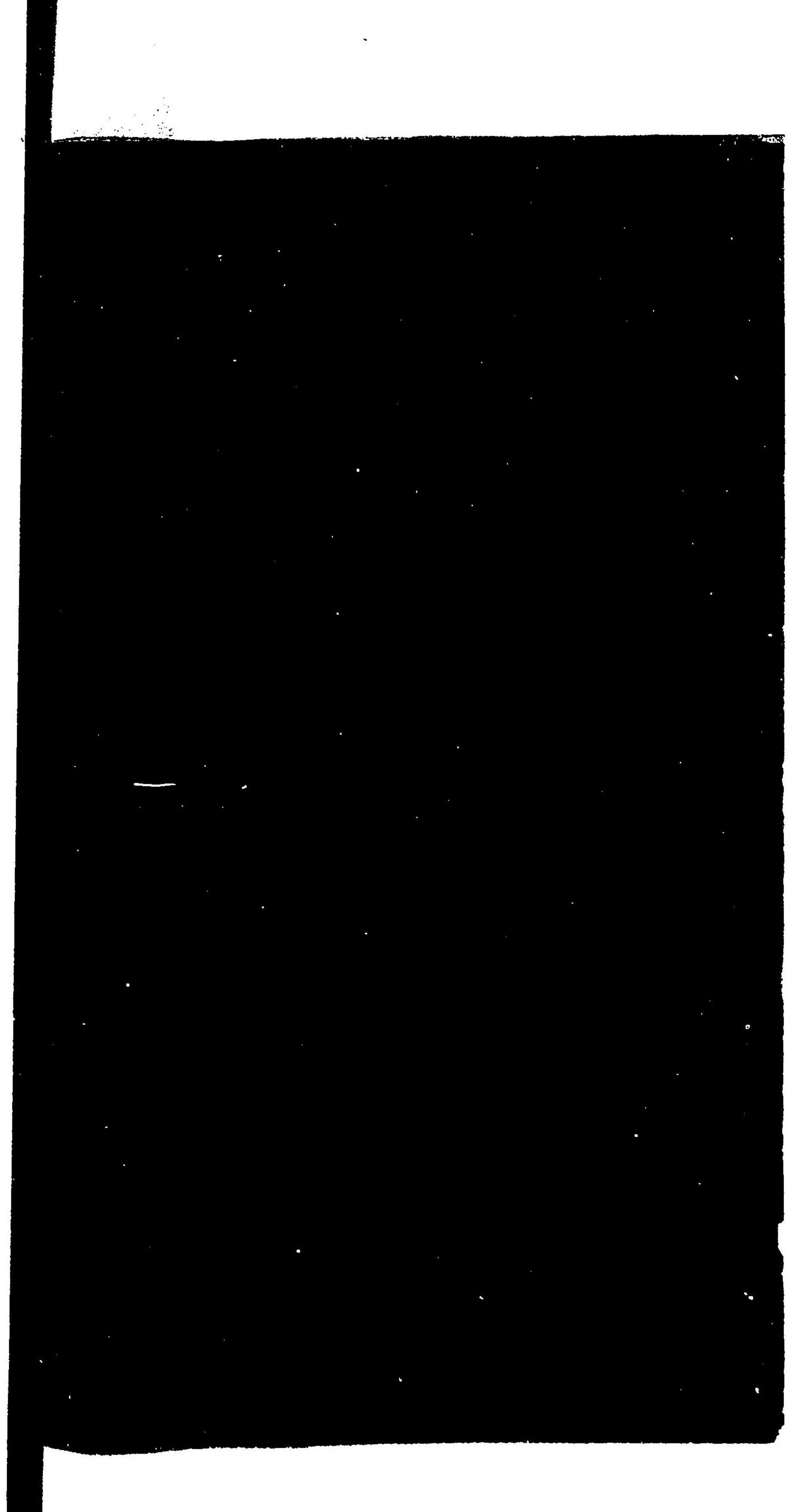
共 盟
館 證

下谷區竹町十二番地
講演者 小谷 鐵次 郎

淺草區南元町三十五番地
發行者 三 輪 眞 一

本所區相生町三丁目六番地
印刷者 木 村 文 藏

淺草區南元町	いんば書房	三輪	書店
全 左衛門町	盛花堂	岡村	書店
全 三好町	國華堂	山崎	書店
日本橋區濱町二丁目	松陽堂	池村	書店
全 松島町	東新堂	井上	書店
神田區美土代町	文陽堂	富田	書店
下谷仲徒町二丁目	由盛閣	關	書店
淺草區福井町	明治堂	鈴木	書店



特 8
619

097713-000-4

特8-619

宮本武蔵之伝

一竜斎 貞国 / 講演

M34

DBS-1648

